

『ピクウィック・ペーパーズ』に見られるロンドン方言

- - ウェラー親子の言葉を中心として - -

宮田 政徳*

Cockney in *Pickwick Papers*

With Special Reference to the Speeches of Sam & Tony Weller

Masanori MIYATA

0. はじめに (INTRODUCTION)

0.1. 『ピクウィック・ペーパーズ』について (*Pickwick Papers*)

Pickwick Papers (邦訳名『ピクウィック・ペーパーズ』)は19世紀英国の文豪チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の最初の本格的長編小説である。1836年作者が弱冠24歳の時、4月1日より月刊分冊の形式で、当時風刺画家として有名だったRobert Seymourが挿し絵を書き、新興出版社Chapman and Hallから出版された。最初4号までの売れ行きはかんばしくなく、400から500部程度であったが、サム・ウェラーが登場する5号あたりから急に人気上昇した。そして6号からは発行部数が一気に40,000部に達し、翌1837年の11月の最終号までベストセラ

*徳島大学大学開放実践センター

一となったのである。

宮崎孝一は『ピクウィック読本』のはしがきの中で、この小説を「その内容の多様さ、行文の弾力性、筆づかいの老練さは驚嘆すべきものである」と絶賛し、作者についても「早熟な作家は古今数多いが、ディケンズは中でも特に作家の勘と技術をマスターするのが早かった人である」¹⁾と述べている。さてその早熟な作者の最初の連載長編小説である『ピクウィック・ペーパーズ』は、一言でいうと「ピカレスク小説」に属する。そのルーツはスペイン語で「悪漢、悪者」を意味する *picaro* にある。そのスペイン語が何故英語にそのまま入って来たかという、この種の最初の傑作がスペインで生まれたからである。特に有名なのは、あのセルバンテスの『ドン・キホーテ』であろう。英国でこの種の小説が根づいたのは、17～18世紀にかけての作家スモレット(Tobias George Smollett (1727-71))やフィールドイング(Henry Fielding (1707-54))らの小説によってである。ディケンズがこれらの作家の作品を愛読していたのは周知の事実である。つまりこの「ピカレスク小説」は、簡単に日本流に言えば江戸時代の弥次喜多道中記のようなもので、主人公が旅の行く先ざきで引き起こす珍談奇談、失敗談の連続物である。

0.2. 登場人物ウェラー親子について (Sam & Tony Weller)

ピカレスク小説であるこの物語は現役を引退した、金回りのいい元実業家ピクウィック氏(Mr. Pickwick)が主人公となって諸国を漫遊する話である。しかし、既に述べたように、最初は売れ行きがいまひとつであった。ところが偶然に出会った靴磨きのサム・ウェラー(Sam Weller)が彼の召使いになってから、俄然として人気上昇した。小池滋は、サムを「ご主人を哀れみつつ、それでいて愛さずにはいられない忠実なサム・ウェラーは、明らかにサンチョ・パンサの再来である」²⁾と述べて、彼がこの小説の中で果たしている役割の重要性を説いている。そういう訳でこの小説はサムが登場してからその面白さが増していく。さらに彼の父親でロンドンの馬車の御者をしているトニー・ウェラー(Toney Weller)が登場するようになると、二人のやりとりの軽妙さによってテンポがさらに早くなって一層面白くなる。この小説の魅力に彼等二人の存在は欠かせないのである。

ウェラー親子を特徴づけるのは、教養のない下層階級出身ながら、二人の実直

で底抜けなほど明るい奔放な性格はもちろんであるが、やはり何と云っても一番強烈に特徴的なものは、彼等の話す訛りの強いロンドン方言(Cockney)であろう。実際ディケンズの他の作品中でも、彼等ほど多くロンドン方言を話す人物は見あたらない。ロンドン方言を研究するには彼等の言葉を調べれば、その材料には事欠かないと言えるほどである。

0.3. ロンドン方言について (Cockney)

それではウェラー親子が話すロンドン方言、コックニーとはどのようなものであうか。それについて述べる前に、Cockney の語源を見てみる。研究社の新英和大辞典(第5版)では、「ME:*coken-ey*=cook's egg は「出来損なった黄卵のない小さな卵」の意から「意気地なし」「甘えっ子」、再転して地方人から見た「都会人」(1600年頃)となった」と説明してある。と言うわけで元々は都会人、つまりひ弱なロンドン子を指していたらしい。OEDでは、「One born in the city of London; strictly (according to Minshew) 'one born within the sound of Bow Bells'」と定義して、厳密には「Bow Bellsの音が聞こえる範囲に生まれて住んでいるロンドン人」を指すとしている。ここでいうBow Bellsとは、ロンドンのCheapsideにあるSt. Mary-le-Bow教会の鐘を指している。そしてその後コックニーは、ロンドンのその地区の生粋のロンドン子が話す言葉をも指すようになったのである。

さてここで二つほど断っておかなければならない。一つ目は果たしてディケンズがどれほど忠実に当時のコックニーを再現しているか、ということである。このことについては賛否両論がある。William Matthewsは*Cockney Past and Present*の中で次のような懐疑的な見方を述べている。

The Dickensian style of Cockney was a literary convention and it is dangerous to take it as an adequate representation of the dialect as most scholars have done.³⁾

つまり、ディケンズの小説中のコックニーは、あくまでも話し言葉を文学的に表したもので、実際の発音や語法を忠実に再現したものと見なすのは危険である、と注意を促している。これに対して、Stanley Gersonは*Sound and Symbol*の中で、

ディケンズはコックニーを忠実に再現している、という次のような意見を述べている。

In this particular fact, more than any other, one may see Dickens's great ability to reproduce reality of language in his novels.⁴⁾

ということではいずれにしても、今回はコックニーの言語材料をディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』からとるので、ここはディケンズがよく言われている正確な耳と言語感覚で、コックニーを比較的正確に再現しているという立場で記述していくことにする。

さらに二つ目に断っておかなければならないことは、コックニーもイギリスの地域方言の一つであり、その中には他の地域方言の中にある共通の階級方言も含まれるので、地域方言としてのコックニーに独自の用法は二、三あるものの、その他の多くの用法は他の方言の階級方言と重なっている、ということである。という訳で本稿では、地域方言としてコックニーと、その中の下層階級の人々が話す階級方言(=俗語)の両者を見ていくことになる。この両者はハッキリ区別できる場合もあれば、区別が曖昧な場合もある。

そこで次章から、この地域方言と階級方言の両者を含めてロンドン方言の特徴を、ウェラー親子の言葉(Speech)を中心として、音韻、語彙、文法、統語論に分けて詳述して行く。その方言を記述する際、音韻編では、Dickensの全小説中の登場人物の方言(地域方言と階級方言)の発音を扱った、Stanley Gersonの*Sound and Symbol*を主な参考とし、また、語彙編では、前述のOED(=Oxford English Dictionary)を参考にしている。『ピクウィック・ペーパーズ』のテキストからの引用は、全てOxford大学出版の1971年版*The New Oxford Illustrated Dickens*に依り、テキストからの引用箇所は引用の最後に括弧で、人物名、章、頁数を付け加えている。さらにポイントとなる箇所には下線を施しているが、これは全て筆者によるものである。又、テキストの『ピクウィック・ペーパーズ』に言及する時は、略号としてPPを使っている。

1. 音韻 (PHONOLOGY)

1.1. 母音 (Vowels)

1.1.1. 母音消失 (Omission of Vowels)

1.1.1.1. [ə]音消失 (Omission of Vowel [ə])

方言や口語では、強勢のない音節のあいまい母音[ə]は語頭や語中では省略される傾向にある。以下の例ではアポストロフィーによってその箇所の[ə]音が省略されていることが分かる。語頭で省略されている例は、次の 1 ~ 4 で、下線部の母音消失前の語は 1 が about , 2 が opinion、3 が attachment、4 が apprentice、5 が original である。

1. 'So now they has two ropes, 'bout six foot apart,' (Sam Weller, XVI, 210)
2. '...And my 'pinion is, Sammy, that if your governor don't prove a alleybi, he'll be what the Italians call reg'larly flummoxed, and that's all about it.' (Tony Weller, XXXIII, 455)
3. 'It's the suspicion of a priory 'tachment as is the cause of it all,' replied Sam. (Sam Weller, XXXIX, 551)
4. '...wos you ever called in, ven you wos 'prentice to a sawbones, to wisit a postboy?' (Sam Weller, LI, 714)
5. 'Oh, that's the 'rig'nal, is it?' (Sam Weller, XXXI, 421)

語中で省略されている例は、次の 6 ~ 9 で、下線部の母音消失前の語は 6 が gentleman , 7 が suppose、8 が honorable、9 が fashionable である。

6. '...--large room--lots of gen'l'm'n--heaps of papers, pens and ink, and all that 'ere.' (Sam Weller, XIII, 166)
7. 'I s'pose they are," said Sam. (Sam Weller, XXVII, 371)
8. '...; it's a very hon'rabable thing to them,....' (Sam Weller, XXXI, 422)
9. '... , for me and the other fash'nables only come last night.' (Sam Weller, XXXV, 498)

1.1.1.2. [i]音消失 (Omission of Vowel [i])

あいまい母音[ə]と同様に、[i]音も強勢のない音節では、語頭や語中で省略される傾向にある。以下の例では、7を除いて、アポストロフィーによってその箇所の[i]音が省略されていることが分かる。語頭で省略されている例は、次の1～2で、下線部の母音消失前の語は1が election , 2が especially である。

1. 'Why he drove a coach down here once,' said Sam; ' lection time came on, and he was engaged by vun party to bring down woters from Loddon.' (Sam Weller, XIII, 167)
2. '... wih he'd read with sich intense interest and persewerance as worked the other customers up to the wery confines o' desperation and insanity, 'specially one i-rascible old gen'l'm'n as the vaiter was always obliged to keep a sharp eye on,' (Sam Weller, XLIV, 616)

語中で省略されている例は、次の3～7で、下線部の母音消失前の語は3が believe , 4が business, 5が ordinary, 6が original, 7が directly である。

3. 'It runs in the family, I b'lieve, sir,' replied Mr. Weller. (Sam Weller, XVI, 209)
4. '...blow this here water-cart bis'ness. It won't do no good, this won't.' (Sam Weller, XVI, 215)
5. '... I have heerd how many ord'nary women, one widder's equal to, in pint o' comin' over you.' (Tony Weller, XXII, 314)
6. 'Oh, that's the 'rig'nal, is it?' said Sam. (Sam Weller, XXXI, 421)
7. '...and notwithstanding that the drag was put on directly by the medikel man it wornt of no use at all....' (Tony Weller, LII, 729)

1.1.2. 母音変化 (Change of Vowels)

1.1.2.1. [ʌ]音 [i]音又は[e]音 (Change of Vowel [ʌ] to [i] or [e])

この音変化について Gerson は、just の例を挙げながら "both *jest* and *jist* are widespread throughout England..."¹⁵⁾と述べて、just が *jest* や *jist* になるのは英国中の方言で見られると指摘している。PP の中には、1～2のように *sich* 又は *sitch* (=such)

と、3 ~ 6 のように *jist* 又は *jest* (=just) の 2 語の例が見られる。

1. ..., 'for this here compliment; wich, comin' from sich a quarter, is wery overwhelmin'.'
(Sam Weller, XXXVII, 527)
2. '...He's sitch a friend o' the family, Sammy, that wen he's away from us, he can't be comfortable unless he has somethin' to remember us by.' (Tony Weller, XXXIII, 455)
3. "... If ever you're attacked with the gout, sir, jist you marry a wider as has got a good loud voice,' (Tony Weller, XX, 273)
4. '...If ever you gets to up'ards o' fifty, and feels disposed to go a marryin' anybody--no matter who--jist you shut yourself up in your own room,....' (Tony Weller, XXIII, 315)
5. "Cos if it is, jist you step into him with that 'ere card, and say Mr. Veller's a waitin', will you?" said Sam. (Sam Weller, XXXV, 498)
6. 'So all I've come about, is jest this here,' said Sam, disregarding the interruption;..... (Sam Weller, XXVI, 360)

1.1.2.2. [ə]音 [i]音 (Change of Vowel [ə] to [i])

方言では、強勢のない音節で母音[ə]は[i]と発音されることを、S. Gerson は Dickens の他の作品からも多数の例を示して⁶⁾、説明している。PP には次の例が見られる。それぞれ変化する前の下線部の語は、1 が waggon, 2 が waggoner's, 3 が brocoli, 4 が organs, 5 が melancholy, 6 が woman である。

1. 'Lady's shoes and private sittin'-room! I suppose she didn't come in the waggin.' (Sam Weller, X, 120)
2. 'I worn't always a boots, sir,' said Mr. Weller, with a shake of the head. 'I was a vagginer's boy, once.' (Sam Weller, XVI, 209)
3. '...blessed if I think he hardly knows wot my other name is. Vell, young brockiley sprout, wot then?' (Sam Weller, XXXIII, 448)
4. '...the Sawbones as we've been a speaking on, 'ull get as much extra lead in his head as'll damage the dewelopment o' the orgins if they ever put it in spirits arterwards.' (Sam Weller,

XXXIX, 551)

5. 'Avay with melincolly, as the little boy said ven his school-missis died.' (Sam Weller, XLIV, 623)

6. 'The womin,' said Sam, in the same tone. (Sam Weller, XXXIII, 460)

1.1.2.3. [ə]音 [ei]音 (Change of Vowel [ə] to [ei])

この音変化については、Gerson は下の例の 1 と 2 を挙げながら、次のように説明している。即ち、*con-spiraytor* は、"when the suffix is used in words of more than three syllables the main stress falls on the penultimate syllable, except when the word is formed from a verb, in which case to maintain the connexion between verb and noun the stress falls on the same syllable as in the verb. ...when the word has no verb in our own language to correspond to it, the accent is then placed with great propriety upon the *a*, as in Latin..."⁷⁾

即ち「*-ator* で終わる語は英語に対応する動詞がある場合は、*violator*, *instigator*, *navigator* のように動詞と同じ音節に強勢が置かれるが、英語に対応する動詞がない場合は、*emendator*, *gladiator*, *adulator* のように後ろから 2 番目の音節に強勢が置かれるのである。」そこで無教養の方言の話し手は、*conspirator* には *conspire* という対応する動詞があるのに、間違って *conspiraytor* という発音をしているのである。下の例 2 の *prewailance*(=*prevailance*)については、Gerson は"*Prewailance* represents an uneducated pronunciation of *prevalence*, arising from association with the verb."⁸⁾と云って、無教養な人が動詞 *prevail* からの連想で *prevalence* でなく *prevailance* と発音していることを説明している。

1. 'Well then, all in to begin!' cried Sam. 'Sound the gong, draw up the curtain, and enter the two con-spiraytors.' (Sam Weller, XLVII, 662)

2. 'the late prewailance of a close and confined atmosphere has been rather favourable to the growth of veeds,....' (Sam Weller, XLII, 587)

1.1.2.4. [ɑ:]音 [ei]音 (Change of Vowel [ɑ:] to [ei])

この音変化については *OED* は見出し語 *Rather* のところで、"The use of [reiðə(r)], preferred by Walker, is now confined to dialects."、と述べて、今では方言で使われていることを指摘している。1, 2, 3 の *rayther* という発音は PP では、ウェラー親子で 36 回も使われている。4 の *brayvo* について、Gerson は派生して来た元の形容詞 *brave* の発音に引かれて *bravo* でなく *brayvo* になったのではないか⁹⁾、と説明している。

1. 'Fine sleeping place-within ten minutes' walk of all the public offices--only if there is any objection to it, it is that the sitivation's rayther too airy....' (Sam Weller, XVI, 210)
2. '... , but it's rayther too expensive work to be carried on here.' (Sam Weller, XX, 269)
3. 'She's been gettin' rayther in the Methodistical order lately, Sammy;....' (Tony Weller, XXII, 297)
4. 'Brayvo; wery pretty!' said Sam, when the red-nosed man having finished, pulled his worn gloves on... (Sam Weller, XLV, 637)

1.1.2.5. [ə:]音 [ʌ]音 (Change of Vowel [ə] to [ʌ])

この音変化する語は、下の例から分かるように PP には *bust* しかないが、文脈から *burst* が音変化したものとするのが正しいだろう。

1. 'Uncommon,' replied Sam; 'I never see men eat and drink so much afore. I wonder they a'nt afeer'd o' bustin.' (Sam Weller, XIII, 166)
2. '... , and the great round watch almost bustin' through his grey kersey smalls.' (Sam Weller, XXVIII, 391)
3. 'He bust out a cryin', air, and said you wos wery gen'rous and thoughtful....' (Sam Weller, XLVII, 667)

1.1.2.6. [ə:]音 [ɑ:]音 (Change of Vowel [ə:] to [ɑ:])

この音変化について Gerson は、*marcy*(=mercy), *sarvant* (=servant) 等の例を挙げながら、 "...Mattherw's statement that [ɑ:] for [ə:] continued to be common in Cockney

speech till late in the nineteenth century."¹⁰⁾と述べている。PP では *warn't* (=weren't) の例だけが見られる。

1. 'Queer start that 'ere, but he was one too many for you, warn't he? Up to snuff and a pinch or two over--eh?' (Sam Weller, XII, 154)
2. 'Oh, no,' replied Sam, with a solemn shake of the head, 'it warn't him.' (Sam Weller, XXXIX, 548)

1.1.2.7. [a:]音 [ɛ]音 (Change of Vowel [ə:] to [ɛ])

この音変化について、Gerson は 17 世紀では、"*are* and *air* are identical in pronunciation"¹¹⁾という意見を述べている。この古い発音が方言に残っているであろう。

1. '...but I will say, that I never thought you was sich uncommon nice men as I find you air.' (Same Weller, XXXVII, 527)
2. 'You air, air you, sir?' inquired Mr. Weller, firmly. 'Wery good, sir. Then so am I.' (Sam Weller, XLII, 600)

1.1.2.8. [æ]音 [ɛə]音 (Change of Vowel [æ] to [ɛə])

この音変化は Dickens の全作品中二例のみで、下の 1 の *pairamount* (=paramount) の他に、*Christmas Stories* 中の *cairawan* (=caravan) がある。Gerson は *pairamount* について、"*The word is possibly due to association with pair.*"¹²⁾と述べて、*pair* からの連想から出てきた発音であることを指摘している。

1. 'I should very much like to ha' joined you, sir; but the gov'ner o' course is pairamount.' (Sam Weller, XLIV, 626)

1.1.2.9. [ə]音 [ɛə]音 (Change of Vowel [ə] to [ɛə])

この音変化は PP には次の *contrairey* 一例しか見られない。contrary が何故 *contrairey* の発音に変化したのかについては、Gerson は「18 世紀の初めは contrary の強勢は第一音節、第二音節どちらにも置かれていたが、18 世紀の後半にかけて、俗語では第二音節に強勢を置くようになったので、その音節の発音が変化したものである」¹³⁾と述べている。18 世紀の俗語の発音が残っているのである。

1. '... , as I remember, though that may ha' been done for anythin' I know to the contrairey--....' (Sam Weller, XLV, 642)

1.1.2.10. [ə]音 [ɔ:]音 (Change of Vowel [ə] to [ɔ:])

この音変化には、Gerson は「*form* や *inform* などの語の影響がないと *familiar* が *formiliar* と発音される理由は説明出来ない」¹⁴⁾と述べている。

1. 'Cos ugliness and svindlin' never ought to be formiliar with elegance and wirtew,' replied Mr. Weller. (Sam Weller, XXV, 350)

1.1.2.11. [ə:]音 [ɔ]音 (Change of Vowel [ə:] to [ɔ])

この音変化について Gerson は「*worst* とその俗語形 *wust* がブレンドされたものだろう」¹⁵⁾と説明している。

1. 'Do! *You*, sir! That a'nt the wost on it, neither.' (Sam Weller, X, 121)

1.1.2.12. [ə:]音 [ɔ:]音 (Change of Vowel [ə:] to [ɔ:])

Be 動詞の二人称複数過去の否定の縮約形には 1.1.2.6.で見られた *warn't* の他に、次の例のように *worn't* という形も見られる。下の二例では俗語の影響で主語が一人称単数や三人称単数にでも使われている。

1. 'I worn't always a boots, sir,' said Mr. Weller, with a shake of the head. 'I was a vagginer's boy, once.' (Sam Weller, XVI, 209)
2. 'Worn't one o' these chaps slim and tall, with ong hair, and the gift o' the gab wery gallopin'?' (Tony Weller, XX, 271)

1.1.2.13. [æ]音 [ɔ]音 (Change of Vowel [æ] to [ɔ])

この音変化に対して Gerson は、"Smart in his *Grammar of English Sounds* write that a pronunciation such as *wrop* for *wrap* 'sufficiently dintinguishes the vulgar of London from the well-instructed.'"¹⁶⁾ と述べて、ロンドン英語の特徴であることを指摘している。

1. 'Fine time for them as is well wropped up, as the Polar Bear said to himself, ven he was practicing his skating,' replied Mr. Weller. (Sam Weller, XXX, 406)

1.1.2.14. [i]音 [e]音 (Change of Vowel [i] to [e])

この音変化について、*OED* は見出し語'Set'の説明で、"*Set*, v. Sense B, 5, *intr.* 'To sit, be seated... Now *dial.* or *vulgar.*'"と述べているように、方言や俗語で使われる用法である。さらにこれには古い時代から、自動詞の *sit* と他動詞の *set* が混同されがちであったという事実も関係しているようである。

1. 'Wot, and leave three quarters of a bowl of punch behind you!' said Sam; 'nonsense, set down agin.' (Sam Weller, XXXI, 424)
2. 'Set down, sir; ve make no extra charge for the settin' down, as the king remarked wen he blowed up his ministers.' (Sam Weller, XLV, 633)

1.1.2.15. [i]音 [i:]音 (Change of Vowel [i] to [i:])

この音変化について Gerson は他の例、*leetle* (=little)や *mischeevus* (=mischievous)

等を挙げて、[i]音が長音化されることを説明している。その話し手の多くは俗語を喋る人物であるが、一番の理由は強調のためではないか、と述べている。¹⁷⁾次のPPからの例1の *brockiley* の標準的綴りは *broccoli* である。

1. '...blessed if I think he hardly knows wot my other name is. Vell, young brockiley sprout, wot then?' (Sam Weller, XXXIII, 448)

1.1.2.16. [i]音 [ʌ]音 (Change of Vowel [i] to [ʌ])

この音変化については Gerson が全く言及していないので、不可解である。しかし、文脈上 *construcker* は(boa) constrictor であるので、[i]音が[ʌ]音に訛っていると思われる。

1. 'I'll tell you what it is, young boa construcker,' said Mr. Weller, impressively;.... (Sam Weller, XXVIII, 390)

1.1.2.17. [u]音 [ʌ]音 (Change of Vowel [u] to [ʌ])

この音変化については、Gerson は下の1の *buzzum* (=bosom)の場合を次のように説明している。即ち、「18世紀ごろにはこの語は四通りの発音 (bozum[ɔ], buzzum [ʌ], boozum[u], bouzum[au])があったが、現代に残っているのは[buzəm]と発音される綴り字の bosom で、*buzzum* は方言に残った」¹⁸⁾のである。

1'...'I think he'd better keep 'em in his own buzzum, than let 'em ewaporate in hot water,....' (Sam Weller, XVI, 215)

1.1.2.18. [e]音 [i]音 (Change of Vowel [e] to [i])

この音変化はロンドン方言に特徴的だと思われる。William Matthews はその著 *Cockney Past and Present* で、"Instead of short *e*, Cockneys often pronounce short *i*, ...,

some Cockneys using it almost as consistently as Irishmen."¹⁹⁾ と述べて、英国北部方言で特有のこの音変化がロンドン方言でも頻出することを指摘している。PP からの例は、1 では、*ingine* が *engine* を、2 では *chimical* が *chemical* を、3 では *agin* が *again* を、4 では Raddle 夫人の *forgit* が *forget* を、それぞれ表している。

1. 'Get off, I tell you. What are you crying over me for, you portable ingine?' (Sam Weller, XXIII, 318)
2. 'It may be, but I ain't much in the chimical line myself, so I can't say.' (Sam Weller, XXXVII, 519)
3. 'I'll try and bear up agin such a reg'lar knock down o' talent,' replied Sam. (Sam Weller, XXXVII, 520)
4. 'Don't talk to me, don't, you brute, for fear I should be perwoked to forgit my sect and strike you!' said Mrs. Raddle. (Mrs. Raddle, XLVI, 647)

1.1.2.19. [e]音 [æ]音 (Change of Vowel [e] to [æ])

この音変化に対して、Gerson は下の PP からの唯一例 *arrand* (=errand) を挙げながら、「元々 16 世紀から 18 世紀にかけては *errand* は [æɾənd] と発音されていたが、18 世紀当時の口語の影響で発音が変化し [e] の音になり、元の [æ] は方言に残った」²⁰⁾ と説明している。

1. 'For all I know'd he vas one o' the regular three-pennies. Private room! And a lady too! If he's anything of a gen'lm'n, he's vorth a shillin' a day, let alone the arrands.' (Sam Weller, X, 120)

1.1.2.20 [ɔ:]音 [æ]音 (Change of Vowel [ɔ:] to [æ])

この音変化については Gerson や Matthews が全く言及していないので不可解である。PP にも下の例が一つだけ現れるので、例を挙げるだけにとどめる。*sassage* の本来の綴りは *sausage* となるところである。

1. 'Celebrated Sassage factory,' said Sam. (Sam Weller, XXXI, 423)

1.2. 二重母音 (Diphthongs)

1.2.1. 二重母音変化 (Change of Diphthongs)

1.2.1.1. [ai]音 [i:]音 (Change of Diphthong [ai] to [i:])

この音変化については Gerson は、「Dickens の作品ではほとんど方言や俗語として使われているが、18 世紀では一般に普通に使われていた」²¹⁾、と述べている。恐らく 19 世紀になるにつれて標準英語では [ai] と変化していき、[i:] の発音は方言や俗語に残っていったのであろう。PP には下の 1. *profeel* (=profile), 2 の *obleeged* (=obliged) の例が見られる。

1. '...and brighter colours than ever a likeness was took by the profeel macheen (wich p'raps you may have heerd on Mary my dear) although it does finish a portrait and put the frame and glass on complete, ...' (Sam Weller, XXXIII, 454)

2. 'Wery much obleeged to you, my dear,' replied Mr. Weller; 'but I'm quite comfortable vere I am.' (Tony Weller, XLV, 633)

1.2.1.2. [iə]音 [ei]音 (Change of Diphthong [iə] to [ei])

この [iə] 音が発音の際、舌の位置が下がり [ei] 音に変化することについて Gerson は、「It will be noted that nearly all the users of the form *raly* in Dickens are in the footman-servantmaid-landlady category.²²⁾」と述べているように、ほとんど女中などの下層階級で使われていることを指摘している。PP には下の 1 と 2 の *raly* (=really) の例が見られる。

1. 'No!' said Mr. Weller, shaking his son eagerly by the hand, 'would you raly, Sammy; would you, though?' (Tony Weller, XXVII, 373)

2. 'Raly, gentlemen,' said Sam, 'I'm not wery much in the habit o' singin' without the

instrument;....' (Sam Weller, XLIII, 611)

1.2.1.3. [ɛə]音 [e]音 (Change of Diphthong [ɛə] to [e])

この音変化の例は、daresay が *dessay* となるものだけである。Gerson は、"The consequent shortening of the vowel [e] took place as a result of lack of stress."²³⁾ と述べて、dare say が一語の daresay となる時、強勢のない第 1 音節の [ɛə] が短く [e] となることを指摘している。PP では下の例のように、*dessay* は *des-say* と表記されている。

1. '..."she'll have me, if I ask, I des-say--I never said nothing to her, but she'll have me, I know."....' (Sam Weller, X, 122)
2. 'Yes, I des-say I should ha' managed to pick up a respectable livin' replied Sam,.... (Same Weller, XXII, 314)
3. 'We shall get on by degrees, I des-say. We'll try a better one, bye-and-bye.' (Sam Weller, XXXVII, 521)

1.2.1.4. [ei]音 [æ]音 (Change of Diphthong [ei] to [æ])

この音変化については、Gerson は *babby*(=baby)の例を挙げながら、"Accorindg to Matthews (p. 183) the short [æ] in *babby* was regarded as a Cockneyism during the 18th and 19th centuries."²⁴⁾と述べているように、この用法はロンドン方言に特徴的なものである。PP には下のよう *babby*, *babbies* の例だけが見られる。

1. '--"To be sure we did," says the touter, "you're a babby to him--this way, sir--this way!"' (Sam Weller, X, 121)
2. '...Business first, pleasure arterwards, as King Richard the Third said wen he stabbed the t'other king in the Tower, afore he smothered the babbies.' (Sam Weller, XXV, 339)
3. '..., and grind it into sassages as easy as if it was a tender young babby.' (Sam Weller, XXXI, 423)

1.2.1.5. [ou]音 [ə]音 (Change of Diphthong [ou] to [ə])

綴り字で語尾-ow[ou]が-er[ə]に変化することについて、Gerson は、"An early mention of -er or -ow as a cockneyism is made by T. Sheridan *A Course of Lectures on Elocution* 1762 (pp. 33-4)."²⁵⁾と述べているように、ロンドン方言の特徴である。PP には下の 1. *feller* (=fellow), 2 の *widder* (=widow), 3. *swaller* (=swallow), 4 の *winder* (=window)などの例が見られる。

1 'I never see such a feller,' said Sam. (Sam Weller, XVI, 217)

2. '... that as she was such an uncommon pleasant widder,' (Tony Weller, XX, 271)

3. 'He was the master o' that 'ere shop, sir, and the inwenter o' the patent-never-leavin'-off sassage steam ingine, as ud swaller up a pavin' stone if you put it too near,' (Sam Weller, XXXI, 423)

4. 'I'd pitch him out o' winder, only he couldn't fall far enough, 'cause o' the leads outside.' (Sam Weller, XL, 562)

1.2.1.6. [ɔi]音 [ai]音 (Change of Diphthong [ɔi] to [ai])

この音変化については Matthews が、"The pronunciation of *oi* with the sound long *i*, particularly before *n* and *l*, is still occationally used by old Cockneys, *ile* (oil), *spile*, *pint* (point)."²⁶⁾と述べているように、ロンドン方言に特徴的と言えるだろう。PP には下の 1. *appint* (=appoint), 2 の *biled* (=boiled), 3. *disappinted* (=disappointed), 4 の *disappintment* (=disappointment), 5. *pint* (=point), 6 の *pison* (=poison), 7. *spile* (=spoil)などの例が見られる。

1 '... and all the rest o' my property, of ev'ry kind and description votsoever to my husband, Mr. Tony Veller, who I appint as my sole eggzekiter.' (Tony Weller, LV, 770)

2. '...I never heerd a biled leg o' mutton called a swarry afore. I wonder wot they's call a roast one.' (Sam Weller, XXXVII, 518)

3. 'Oh, wery well,' said Sam; 'that's another thing. P'raps he'd resign if you disappointed him.' (Sam Weller, XXXVII, 527)
4. '...I wouldn't like to say I was altogether positive, in case of any subsekt disappintment,....' (Tony Weller, XLII, 607)
5. 'Ah to be sure,' said Sam with a cunning look, 'that's the pint. Who could ha' told me?' (Sam Weller, XXXIX, 548)
6. '...--no matter who--jist you shut yourself up in your own room, if you've got one, and pison yourself off hand.' (Tony Weller, XXIII, 315)
7. 'P'raps we had,' replied Sam, 'or they'll overdo the swarry, and that'll spile it.' (Sam Weller, XXXVII, 519)

1.3. 子音 (Consonants)

1.3.1. 子音消失 (Omission of Consonants)

1.3.1.1. [d]音消失 (Omission of Consonant [d])

この音変化について Gerson は、 "...for loss of *d*, which takes place frequently after a nasal consonant."²⁷⁾と述べて、鼻音の子音の後でしばしば起きるとしている。この用法はロンドン方言に限らず、ヨークシャー方言などにも広く見られる現象である。PP からは次のように、1 が *pun'* (=pound), 2 が *funs* (=funds), 3 が *wagabone* (=vagabond)などの例が見られる。

1. 'Wery glad to see you, indeed, and hope our acquaintance may be a long 'un, as the gen'l'm'n said to the fi' pun' note.' (Sam Weller, XXV, 350)
2. 'Oh! the funds,' said Sam.
'Ah!' rejoined Mr. Weller, 'the funs; two hundred pounds o' the money is to be investid for you, Samivel, in the funs;....' (Tony Weller, LII, 736)
3. 'You von't think o' arrestin' your won son for the money, and sendin' him off to the Fleet, will you, you unnat'ral wagabone?' (Sam Weller, XLIII, 609)

1.3.1.2. [f]音消失 (Omission of Consonant [f])

この用法については Gerson は、Dickens の *Nicholas Nickleby* のヨークシャー出身の人物 Browdie の *himsel* (=himself) の例や、C. Bronte の *Jane Eyre* からの *mysel* などの例を挙げて、ヨークシャー方言の特徴であること指摘している。²⁸⁾しかし次のサム の例から分かるようにロンドン方言でも広く使われていたと思われる。1 ~ 2 が *arter* (=after), 3 ~ 4 が *arterwards* (=afterwards) の例で、5 は 'handkerchief' が訛って *ankercher* となっている。

1. "Self-acting ink, that 'ere; it's wrote your mark upon the wall, old gen'lm'n. Hold still, sir; wot's the use o' runnin' arter a man as has made his lucky, ...' (Sam Weller, X, 131)
2. 'I think I'd better see arter it at once,' said Sam, still hesitating. (Sam Weller, XLIII, 613)
3. '... "Not know!" says the lawyer.-"No more nor you do," says my father, "can't I put that in arterwards?" ...' (Sam Weller, X, 122)
4. '... , and what's worse than that, the old gen'l'm'n's digestion was all wrong ever arterwards, to the wery last day of his life; ...' (Sam Weller, XXVIII, 391)
5. 'What's a moral pocket ankercher?' said Sam; 'I never see one o' them articles o' furniter.' (Sam Weller, XXVII, 368)

1.3.1.3. [h]音消失 (Omission of Consonant [h])

この音変化はロンドン方言では特に顕著である。不必要な所に [h] 音を付け足したり、必要な所で [h] 音を省略するのである。Gerson は、"Natives of London are supposed to make the greatest mistakes with regard to the sound of 'v' and 'w', and in sounding the letter 'h' improperly." ²⁹⁾ と述べている。この [h] 音変化と [v] 音・[w] 音変化はロンドン方言の二大特徴と言ってよいだろう。先ず [h] 音消失では、語頭の [h] 音が省略されるものが殆どである。Dickens の全例の中で唯一、語中で省略されているものが、下の PP からの例 7 の *Leaden'all* (=Leadenhall) である。その他には、1 が *ankercher* (=handkerchief), 2 が *'andsome* (=handsome), 3 が *ansome* (=handsome), 4 が *'art* (=heart), 5 が *'ouse* (=house), 6 が *'ousemaid* (=housemaid) 等の例が見られる。

1. 'What's a moral pocket ankercher?' said Sam; 'I never see one o' them articles o' furniter.'
(Sam Weller, XXVII, 368)
2. '...You ain't so wery andsome that you can afford to throw away many o' your good looks....' (Sam Weller, XXIII, 317)
3. '...and I'm still more obliged to the other gen'l'm'n, who looks as if he'd just escaped from a giant's carrywan, for his ansome suggestion....' (Sam Weller, XXIV, 336)
4. '...', that I raly hadn't the art to disappint her....' (a gentleman in blue, XXXVII, 523)
5. 'Why, then,' said the boy, 'you was to come to him at six o'clock to our ouse,' (a messenger boy, XXXIII, 448)
- 6 'Only two in our kitchen,' said Mr. Muzzle, 'cook and ousemaid.' (Mr. Muzzle, XXV, 349)
- 7 '...--Blue Boar, Leaden'all Markit. Shall I say you're comin'?' (a messenger boy, XXXIII, 448)

1.3.1.4. [j]音消失 (Omission of Consonant [j])

この音変化について、Gerson は B. H. Smart が *A New Critical Pronouncing Dictionary of the English Language* の中で、"*Toos-day* and *dooty* are described as Cockney 'negligencies.'³⁰⁾ と書いているのを引用している。また Matthews も "The pronunciation of long *u* as *oo* is common in present-day Cockney, *dook* (duke), *toon* (tune), *soot* (suit), *noo* (new), etc."³¹⁾ と述べて、今でもロンドン方言では普通の用法であると指摘している。下の PP からの例では、1 の *constitootional* が constitutional を、2 の *unconstitootional* が unconstitutional を、3 の *commoonicate* が communicate を、4 の *dooty* が duty を、5 の '*fluctooatin*' が fluctuating を、6 の '*manooover* が maneuver を表している。

1. '...it all turns to warm water, and comes a' pourin' out o' their eyes. 'Pend upon it, Sammy, it's a constitootional infirmity.' (Tony Weller, XLV, 636)
2. 'Wy, none o' them unconstitootional ways o' doing it,' retorted Sam. (Sam Weller, XLIII,
3. '...my duty to your gov'ner, and tell him if he thinks better o' this here bis'ness, to commoonicate vith me.' (Tony Weller, XLV, 638)

4. '...for I knows him better so he sends his dooty in which I join and am Samivel infernally yours.' (Tony Weller, LII, 730)
5. 'Them things as is always a fluctooatin', and gettin' theirselves involved somehow or another vith the national debt,....' (Tony Weller, LII, 7736)
6. 'I wos married fust, thay vay myself, sir, and Sammy wos the consekens o' the manooover.' (Tony Weller, LVI, 787)

1.3.1.5. [n]音消失 (Omission of Consonant [n])

この音変化の例は不定冠詞の *an* が *a* となる場合である。歴史的には *OED* を見ると、古英語時代には不定冠詞は *an* だけしかなかったことが分かる。そのうちに *an* の [n] 音が子音の前で落ち始め、やがて母音の前でも落ち始めたが、どういう訳かある時期 (1600-1700) から母音の前から落ちるのは止まってしまう。例えば、母音以外では [h] 音の前で、1700 年頃にはまだ *an house*, *an hermitage* という用法が残っていたようだ。現代英語ではその名残りが *an hour* というような語にあると考えられる。Matthews が、"The habit of some Cockneys of using the ordinary indefinite article *a* before words beginning with a vowel, *a orange*, *a apple*, etc., is also age-old."³²⁾ と述べてるように、方言では母音の前でも [n] 音が落ちていくことが続いたと考えられる。PP からの例を挙げておく。

1. '..."And arter all, my Lord," says he, "it's a amable weakness."...' (Tony Weller, XXII, 314)
2. '...', and I'm still more obliged to the other gen'l'm'n, who looks as if he'd just escaped from a giant's carrywan, for his 'ansome suggestion; but I should prefer your givin' me a answer to my question,....' (Sam Weller, XXIV, 336)
3. '...', and as fast as he eats 'em, he takes a aim vith the shells at young dropsy,' (Sam Weller, XXX, 407)
4. 'I'm afeerd there's a orkard gen'l'm'n in 'em, sir,' replied Sam. (Sam Weller, XXX, 411)
5. 'Wot's the good o' callin' a young 'ooman a Wenus or a angel, Sammy?' (Tony Weller, XXXIII, 453)

6. 'Sign it "Pickvick," then,' said Mr. Weller; 'it's a werry good name, and a easy one to spell.' (Tony Weller, XXXIII, 454)
7. 'Vell,' said Mr. Weller, 'now I s'pose he'll want to call some witnesses to speak to his character, or p'raps to prove a alleybi....' (Tony Weller, XXXIII, 455)
8. 'Now, don't allow yourself to be fatigued beyond your powers; there's a amiable bein'....' (Sam Weller, XXXV, 499)
9. 'I know'd a ostler o' that name,' said Mr. Weller, musing. (Sam Weller, XLIII, 608)
10. 'Wot a old image it is!' exclaimed Sam, indignant at this loss of time. (Sam Weller, XLIII, 609)

1.3.1.6. [t]音消失 (Omission of Consonant [t])

この音変化では、Gerson が下の例 1 の *gen'l'm'n* (或いは *gen'lm'n*) の発音について、"Baumann (p. xxii) notes *gen'lman* as a 'Londonism'."³³⁾と説明しているようにロンドン方言の特徴の一つである。他には、2 が *kep* (=kept), 3 が *mas'r's* (=master's), 4 が *'cap'en* (=captain) 等の例が見られる。

1. 'For all I know'd he vas one o' the regular three-pennies. Private room! And a lady too! If he's anything of a gen'lm'n, he's vorth a shillin' a day, let alone the arrands.' (Sam Weller, X, 120)
2. '... , so they gave out that he'd run away, and she kep on the bis'ness.' (Sam Weller, XXXI, 424)
3. 'I suppose your mas'r's wery rich?' said Sam. (Sam Weller, XVI, 214)
4. 'Don't call him a cap'en,' said Sam. (Sam Weller, XXV, 345)

1.3.1.7. [ð]音消失 (Omission of Consonant [ð])

この音変化は、第三章の文法編で後述する指示形容詞 *that* の俗語の形 *that there* の *there* の語頭の [ð] 音が省略される場合である。Gerson は "Today *that ere* is not to be heard in London speech to my knowledge and it appears that Dickens may have noticed

its decreased use (or its infrequency)."³⁴⁾ と述べて、この用法が現在はロンドンでは聞かれなくなっていることを指摘してる。PP にはサムの場合が 60 回、トニーの場合が 22 回出てくるが、下におのおのから一例ずつ挙げておく。

1. 'Afore I answers that 'ere question, gen'l'm'n,' replied Mr. Weller, 'I should like to know, in the first place, whether you're a goin' to purvide me with a better?' (Sam Weller, XII, 154)
2. 'There's no denying that 'ere,' said Mr. Weller, (Tony Weller, XXII, 299)

1.3.1.8. [v]音消失 (Omission of Consonant [v])

方言では have や of という語において、強勢のない語尾の[v]音が省略される傾向がある。OED は *ha'* について、"worn-down form of HAVE"、*o'* については、"In form *o'*, still used *dial., colloq.*"と述べて、方言や口語では今でも使われていることを指摘している。さらに Gerson は Jespersen から引用しながら、"Thus Jespersen 2.534 says the writing *o* for *of* is to be found occasionally as early as 1300 'but it does not become frequent till the 16th c.'"³⁵⁾と述べて「この用法は 1300 年には既に見られていたが、16 世紀まではそれ程多くはなかった」としている。下の例 5 の *fi'* (=five)については、"Baumann (p. xviii) recorded [fipəns] as a Londonism."³⁶⁾と述べて、特に pence と共に用いられるのはロンドン方言の特徴であるとしている。例 5 では pound と共に用いられているようである。その他は、1 と 2 が *ha'* (=have)、3 と 4 が *o'* (=of)の例である。

1. 'You might ha' made a worser guess than that, old feller,' replied Mr. Weller the younger, (Sam Weller, XXII, 297)
2. 'I do mean that, Sammy,' replied his father, 'and I vish you could ha' seen how tight he held on by the sides wen he did get up,' (Sam Weller, XLV, 631)
- 3 'Uncommon,' replied Sam; 'I never see men eat and drink so much afore. I wonder they a'nt afeer'd o' bustin.' (Sam Weller, XIII, 166)
4. '...We're all wery fond o' you, Mr. Weller, so in case you should have an accident when you're a bringing these here woters down,....' (Sam Weller, XIII, 167)

5. 'Wery glad to see you, indeed, and hope our acquaintance may be a long 'un, as the gen'l'm'n said to the fi' pun' note.' (Sam Weller, XXV, 350)

1.3.1.9. [w]音消失 (Omission of Consonant [w])

この[w]音が省略されることについて、Matthew は、"Cockeny often omit w in unaccented positions..."³⁷⁾と述べて、ロンドン方言ではしばしば w 音が強勢のない位置で省略されることを指摘している。Gerson は特に '*ooman* (=woman) に言及して、"Baumann (p. xxi) mentions the familiar London pronunciation [umən]." (§ 45.2) と述べて、やはりこの用法がロンドン方言に特徴的であることを指摘している。さらに、Matthew は、" '*ooman* is still used by many old Cockneys."³⁹⁾と述べて、今でも聞かれる用法であるとしている。次の例では、1 と 2 が '*ooman* (=woman), 3 が '*orkard*' (=awkward), 4 が '*up'ards* (=upwards), 5 が '*for'ard* (=forward), 6 が '*in'ard* (=inward), 7 が '*ud* (=would) を、8 の '*subseket* が *subsequent* を表している。

1. 'Well, you are a nice young 'ooman for a musical party, you are,' said the boot-cleaner.' (Sam Weller, X, 119)
2. 'Here's an old 'ooman comin' up-stairs, sir,' replied Mr. Weller.... (Sam Weller, XX, 274)
3. 'I'm afeerd there's a orkard gen'l'm'n in 'em, sir,' replied Sam. (Sam Weller, XXX, 411)
4. '...If ever you gets to up'ards o' fifty, and feels disposed to go a marryin' anybody--no matter who--jist you shut yourself up in your own room,....' (Tony Weller, XXIII, 315)
5. 'I feel a great delicacy, gentlemen, in coming for'ard,' said the man in the long coat,.... (a coachman, XXXVII, 525)
6. 'Try an in'ard application, sir,' said Sam, as the red-nosed gentleman rubbed his head with a rueful visage. (Sam Weller, XLV, 635)
7. '...that 'ere 'ooman 'ud marry me by force and wiolence afore it was over.' (Tony Weller, LII, 734)
8. '...I wouldn't like to say I wos altogether positive, in case of any subseket disappointment,' (Tony Weller, XLII, 607)

1.3.2. 子音添加 (Addition of Consonants)

1.3.2.1. [d]音添加 (Addition of Consonant [d])

この音変化については Gerson は、*gownd* (=gown)などの例を Dickens の作品中から挙げて、*English Dialect Grammar* からの "See EDG § 306: 'A final *d* has occasionally been developed after *l, n, r.*' "⁴⁰⁾ という説明を引用している。つまり、時に子音 *l, n, r* の後で *d* が付け加えられるのである。PP には下の 1 と 2 の *drownd* (=drown) の例だけが見られる。

1. '...Why, this here old lady next me is a drowndin' herself in tea.' (Tony Weller, XXXIII, 457)
2. '...', he vishes he may be somethin'-unpleasanted if he don't drownd hisself.' (Sam Weller, XXXIX, 551)

1.3.2.2. [h]音添加 (Addition of Consonant [h])

既に 1.3.1.3.の[h]音消失で述べたように、この[h]音添加はロンドン方言に顕著な二大特徴のひとつである。先ず Gerson は、"Siversten 4.431 more convincingly shows that 'intrusive' *h* is still a characteristic of some London speech."⁴¹⁾ と述べて、この用法が今でもロンドン方言に見られることを示している。同様のことは Matthews も、"I have heard the aspiration of some older Cockneys [i.e. the 'intrusive *h*], particularly when they were trying to be dignified and correct..."⁴²⁾ と指摘している。また何故この用法が生じるかについては、市河三喜は、「H をつけるのは前の語が母音で終わる場合に多く、殊に興奮の余りその語に特別の *emphasis* を置こうと言う場合である」⁴³⁾ とコメントしている。下の例では、1 が *horgan* (=organ), 2 が *hex-traordinary* (=extraordinary), 3 が *hobvious* (=obvious), 4 が *hemperor* (=emperor), 5 が *haction* (=action), 6 が *hinfants* (=infants), 7 が *hextra* (=extra), 8 が *harm-cheer* (=arm-chair), 9 が *hatoms* (=atoms), 10 が *hobserve* (=observe), 11 が *hofferred* (=offered), 12 が *hexpedite* (=expedite), 13 が *his* (=is)を表している。

1. '--"To be sure we did," says the touter, "you're a babby to him--this way, sir--this way!--and sure enough my father walks arter him, like a tame monkey behind a horgan, into a little back office,' (Sam Weller, X, 121)
2. '...But what I look at, is the hex-traordinary, and wonderful coincidence,' (Sam Weller, XIII, 168)
3. 'Well,' said Mr. Weller, 'the adwantage o' the plan's hobvious. (Sam Weller, XVI, 210)
4. 'Rum feller, the hemperor,' said Mr. Weller, as he walked slowly up the street. (Sam Weller, XVIII, 246)
5. '... I should wery much like to see that system in haction, Sammy.' (Tony Weller, XXII, 297)
6. '...A wery happy man he'd ha' been, sir, in the procession o' that ere ingine and two more lovely hinfants besides, it it hadn't been for his wife,....' (Sam Weller, XXXI, 423)
7. '...If they wos a pair o' patent double million magnifyin' gas microscopes of hextra power, ...' (Sam Weller, XXXIV, 484)
8. 'I drove the old piebald in that 'ere little shay-cart as belonged to your mother-in-law's first wenter, into vich a harm-cheer was lifted for the shepherd;' (Tony Weller, XLV, 631)
9. '... , as if he wos afeerd o' being precipitayted down full six foot, and dashed into a million o' hatoms.' (Tony Weller, XLV, 631)
10. 'Beg your pardon, sir,' replied Sam; wot wos you graciously pleased to hobserve?' (Sam Weller, XLV, 633)
11. 'Or hofferred marriage!' said Mrs. Cluppins. (Mrs. Cluppins, XLVI, 652)
12. 'I'm quite agreeable to anythin' as vill hexpedite business, Sammy.' (Tony Weller, LV, 770)
13. 'It 'ull hold him easy, vith his hat and shoes on, and breathe through the legs, vich his holler.' (Tony Welly, XLV, 63)

1.3.3. 子音変化 (Change of Consonants)

1.3.3.1. [ŋ]音 [ŋk]音 (Change of Consonant [ŋ] to [ŋk])

この音変化について Gerson は、 "There is very good evidence of such a pronunciation

in London too."⁴⁴⁾と述べて、ロンドン方言の特徴であるとし、また、Daniel Jones も、
"In London dialectal speech [k] is added to [ŋ] in the words compounded with *-thing*."⁴⁵⁾
と述べていることを指摘している。下の PP からの例では、1 が *think* (=thing), 2
が *everythink* (=everything), 3 が *anythink* (=anything) を表している。

1. '... , wen he's made up his mind to go through every think for principle.' (Sam Weller, XXXVIII, 542)
2. 'Raddle ain't like a man; he leaves everythink to me.' (Mrs. Raddle, XLVI, 648)
3. 'Wery careful that he ain't led away, in a innocent moment, to say anythink as my lead to a conwiction for breach.' (Tony Weller, LVI, 787)

1.3.3.2. [n]音 [l]音 (Change of Consonant [n] to [l])

煙突を表すのに *chimley* (=chimley) という語が見られる。この語については、Gerson が、
"The usual explanation of the form *chimley* is that it arises through a process of
dissimilation."⁴⁶⁾と述べているように、chimney が音の「異化」(dissimilation)を受け
て、*n* 音が *l* 音に変わり *chimley* となったものである。さらに同じ煙突を表すのに [b]
音が添加された *chimbley* という語も見られるので面白い。下の 1 が *chimley*, 2 が
chimbley の例である。

1. 'Delightful prospect, Sam, ' said Mr. Pickwick.
'Beat the chimley pots, sir,' replied Mr. Weller, touching his hat. (Sam Weller, XVI, 208)
2. '...he takes a aim with the shells at young dropsy, who's a sittin' down fast asleep, in the
chimbley corner.' (Sam Weller, XXX, 407)

1.3.3.3. [tʃ]音 [t]音 (Change of Consonant [tʃ] to [t])

この音変化を起こす語はフランス語語源のものであるが、Gerson は、「18 世紀
ごろまでの [tə] という発音が [tʃə] へと変化していく中で、古い [tə] の発音が俗語
や方言に残った」⁴⁷⁾としているが、"However, [-tə]for[-tʃə] is not heard in London

today."⁴⁸⁾ と述べているように、今では、ロンドンでは聞かれなくなっているようだ。PP には次の例が見られる。1 が *furniter's* (=furniture's), 2 が *pictur* (=picture), 3 が *manafacter* (=manufacture) を表している。

1. 'Hallo, said that eccentric functionary, 'furniter's cheap where you come from, sir.' (Sam Weller, X, 131)
2. 'I was a standing starin' in at the pictur shop down at our place,....' (Tony Weller, XXII, 297)
3. '...--I'm afraid to say how much, but as much as a watch can be--a large, heavy, round manafacter, as stout for a watch,....' (Sam Weller, XXVIII, 390)

1.3.3.4. [ð]音 [d]音 (Change of Consonant [ð] to [d])

この音変化について Matthews は、"It was formerly a Cockney habit to replace voiced *th* by *d*, and less frequently, voiceless *th* by *t*... At the present time it is common in *farden*, *furder*...."⁴⁹⁾ と述べている。以前はロンドン方言の習慣であったが、現在では、*farden* (=farther) や *furder*=(further) というような語にはまだ残っている用法であることが分かる。下の 1, 2 のように、PP には *furder* (=further) の例だけが現れている。

1. '..., and rolls down the Strand with the chain bangin' out furder than ever,....' (Sam Weller, XXVIII, 390)
2. 'I'll see you--' Mr. Weller hastily checked himself, and added in a low tone, 'furder fust.' (Tony Weller, LII, 734)

1.3.3.5. [v]音 [w]音 (Change of Consonant [v] to [w])

ロンドン方言の二大特徴のひとつは、この[v]音と[w]音の入れ替わりである。Gerson は、"Natives of London are supposed to make the greatest mistakes with regard to the sounds of 'v' and 'w'."⁵⁰⁾ と述べて、この用法がロンドン子の誤用であることを指摘している。両者の入れ替わりの頻度は、Gerson が"The converting the *w* into *v* is not

so common as the changing the *v* into a *w*."⁵¹⁾と述べているように、[v]音が[w]音になる場合が、[w]音が[v]音になるより多い。Gerson は PP のウェエラー親子の使用法で興味深い事実を指摘している。即ちそれは、サムが使っている全 330 回のうち語頭の[v]が[w]になる場合が 281 回で、語中では 49 回、語尾では 0 回あり、語頭の語は *wery* が 212 回使われて 80%を占めている。トニーについても状況は同様である。しかも語中で使われる場合はその語の音節が強勢を持っているものである。さらに強勢のない語尾では全く使われないので、恐らく[v]が[w]になる場合は単語を強調することと関係があることが推測できる。下にその多数の中から幾つかの例を挙げておく。

1. '... Goes through the archway, thinking how he should invest the money....' (Sam Weller, X, 121)
2. '...--"Impossible!" says the lawyer.--"Wery well," says my father....' (Sam Weller, X, 122)
3. '... , that's one thing, and every hole lets in some air, that's another--ventilation gossamer I calls it.' (Sam Weller, XII, 154)
4. 'Ah,' said Mr. Pickwick, 'do they seem devoted to their party, Sam?'
'Never see such dewotion in my life, sir.' (Sam Weller, XIII, 166)
5. 'Wery fresh,' replied Sam; 'me, and the two waiters at the Peacock, has been a pumpin' over the independent woters as supped there last night.' (Sam Weller, XIII, 166)
6. '... , I think he'd better keep 'em in his own buzzum, than let 'em ewaporate in hot water,....' (Sam Weller, XVI, 215)
7. 'What are you melting vith now? The consciousness o' willainy?' (Sam Weller, XXIII, 320)

1.3.3.6. [w]音 [v]音 (Change of Consonant [w] to [v])

この[w]と[v]とが入れ替わる用法について、H.C.Wyld は、"The interchange of *w* and *v*-- (*ve* for *we*, *wulgar* for *vulgar*, &c)--is at least as old as the fifteenth century."⁵²⁾ と述べて、その用法が 15 世紀にまで遡ると示唆している。前節で述べたように頻度的にはこの[w]が[v]へと変化するのは、[v]が[w]へと変化するのより少なく、歴史

的にも新しいものであると Gerson は説明している。即ち、「昔[v]を[w]と発音する方言の田舎者がロンドンへやって来て、自分の発音がおかしいのに気づき、例えば、名詞の vent (出口) という語を *went* と発音していたので、直そうとするあまり、誤って動詞の *went* も *vent* にしてしまっただけで状況が一層ややこしくなったのではないか」⁵³⁾ というユニークな説を出している。さらに Gerson は PP のウェラー親子の使用法を全て調べて、次のような結論を出している。即ち、「例えばサムの使用頻度数は 217 回であるが、[w]が[v]へと変わらないままの場合が 679 回あるので、全体から見ると、25%位の割合で、目立ってはいるが、それ程多くはない。しかし物語を前半と後半に分けて調べてみると、後半になってウェラー親子が活躍するようになると、その頻度が 40%位に上がっているので、Dickens が意識的にこの用法を多用しているのではないか」⁵⁴⁾ と指摘している。PP からの例を幾つか列挙しておく。

1. 'If he's anything of a gen'lm'n, he's vorth a shillin' a day, let alone the arrands.' (Sam Weller, X, 120)
2. 'Touts for licences,' replied Sam. 'Two coves in white aprons--touches their hats wen you walk in--"Licence, sir, licence?"' (Sam Weller, X, 121)
3. '...and sure enough my father walks arter him, like a tame monkey behind a horgan, into a little back office, vere a feller sat among dirty papers and tin boxes, making believe he was busy....' (Sam Weller, X, 121)
4. '... Goes through the archvay, thinking how he should invest the money....' (Sam Weller, X, 121)
5. "'Pray take a seat, vile I makes out the affidavit, sir," says the lawyer....' (Sam Weller, X, 121)
6. '..."Thankee, sir," says my father, and down he sat, and started with all his eyes, and his mouth vide open, at the names on the boxes. (Sam Weller, X, 121)
7. 'That's the pint, sir,' interposed Sam; 'out yith it, as the father said to the child, wen he swallowed a farden.' (Sam Weller, XII, 154)
8. '...Never mind; there's change of air, plenty to see, and little to do; and all this suits my complaint uncommon; so long life to the Pickvicks, says I!' (Sam Weller, XII, 156)

9. '... and should tip 'em over into the canal without huritn' of 'em, this is for yourself," says he....' (Sam Weller, XIII, 168)
10. 'He wants you particklar; and no one else'll do, as the Devil's private secretary said ven he fetched away Doctor Faustus,' repled Mr. Weller. (Sam Weller, XV, 193)
11. 'Ah, run away,' said Mr. Weller, jumping up on the box, 'Give my compliments--Mr. Veller's compliments--to the Justice,' (Sam Weller, XIX, 260)
12. 'She don't act as a vife, Sammy.' (Tony Weller, XX, 271)
13. 'So you wouldn't subscribe to the flannel veskits?' said Sam, after another interval of smoking. (Sam Weller, XXVII, 370)

1.4. 結合音 (Combination of Sounds)

1.4.1. 結合音消失 (Omission of Combination of Sounds)

1.4.1.1. 語頭音消失 (Omission of First Syllable)

ここでは語頭の強勢のない音節の結合音が省略される場合を見ていく。何故この用法が生じるかについて、Gerson は *respectable* の [ri] 音が省略されて '*spectable* となる用法について、"In the early and middle nineteenth century, speech variations may have been more radical than in the present century, for many people could neither read or write."⁵⁵⁾ と述べて、19 世紀中頃までは多くの人々が読み書きが出来ず、もっぱら耳で英語を聞くだけだったので、単語の強勢のない部分は聞き取れていなかったことを指摘している。PP には語頭の四種類の結合音が省略されている例が見られる。第一は [ik] 音である。下の二例では、1 の '*ceptions* が *exceptions* を、2 の '*cept* が *except* を表している。

1. 'Widders are ceptions to ev'ry rule.' (TonyWeller, XXII, 314)
2. 'Wery glad to hear it,' said Mr. Weller. 'Poetry's unnat'ral; no man ever talked poetry cept a beadle on boxin' day,....' (Toney Weller, XXXIII, 452)

第二は [ri] 音で、下の例では、'*spectable* が *respectable* を表している。

3. 'Why, sir, bless your innocent eyebrows, that's where the mysterious disapperance of a

'spectable tradesman took place four year ago.' (Sam Weller, XXXI, 423)

第三は[di]音で、下の例では、'*pend* が *depend* を表している。

4. '...it all turns to warm water, and comes a' pourin' out o' their eyes. 'Pend upon it, Sammy, it's a constitootional infirmity.' (Tony Weller, XLV, 636)

第四は[hi]音である。この用法について Gerson は、"*EDD* (=English Dialect Dictionay) cites instance of loss of [hi] from Yorkshire, Lancashire and other northern counties. But there seems little reason for loss of [hi] to be a regional phenomenon."⁵⁶⁾ と述べて、一応北部方言の特徴であるが、そこだけに限られたものではないのではないかとコメントしている。Dickens からは PP の下の一例のみである。5 では、'*sterics* が *hysterics* を表している。

5. 'Then she screams wery loud, and falls into 'sterics: and he smokes wery comfortably 'till she come to agin.' (Sam Weller, XVI, 209)

1.4.1.2. [ju]音消失 (Omission of [ju])

この音変化に対して、Gerson は *reg'lar* という語について、"Baumann noted [reglə] among his 'Londonisms' (p. xxii)"⁵⁷⁾ と述べて、ロンドン方言のひとつであるとしている。下の三例では、1 の *reg'lar* が *regular* を、2 の *particklar* が *particular* を、3 の *sing'ler* が *singular* を表している。

1. 'No, no; reg'lar rotation, as Jack Ketch said, wen he tied the men up....' (Sam Weller, X, 119)

2. 'He wants you particklar; and no one else'll do, as the Devil's private secretary said ven he fetched away Doctor Faustus,' replied Mr. Weller. (Sam Weller, XV, 193)

3. 'Wery sing'ler,' said Sam, inwardly congratulating himself upon the softness of the stranger. (Sam Weller, XVI, 213)

1.4.2. 結合音変化 (Change of Combination of Sounds)

1.4.2.1. [ju]音 [i]音 (Change of [ju] to [i])

この音変化について、Gersson は *eddication* (=education)の例を挙げながら、「このフランス語系の語は中英語期にフランス語式発音[ju]から簡略化された[i]へとなりかけたが、この語が使われる環境が学問的な文章であったため、元のフランス語式の[ju]に戻そうという動きが起こり、一時期 "Double forms developed the vulgar *eddicate* beside *educate*." というように、両方の発音が併用され、結局最終的には、*educate* が主流になり、*eddicate* は方言に残ることになったのである」⁵⁸⁾と説明している。下の PP からの例では、1 の *eddication* が education, 2 の *corpilence* が corpulence, 3 の *ockipy* が occupy, 4 の *minit* が minute, 5 の *depity* が deputy, 6 の *dockyment* が document, 7 の *eggzekiter* が executer, 8 の *continey* が continue, 9 の *sitivation's* が situation's, 10 の *actiwally* が actually を表している。

1. 'Wery glad to hear it, sir,' replied the old man; 'I took a good deal o' pains with his eddication, sir;....' (Tony Weller, XX, 271)
2. 'What are you a laughin' at, corpilence?' (Sam Weller, XXXIII, 456)
3. 'I shall ockipy myself in havin' a small settlement with that 'ere Stiggins.' (Tony Weller, XXXIII, 462)
4. '..."I should like to see it for a minit, Bill," he says.' (Sam Weller, XL, 577)
5. 'Strange sitivation for one o' the family,' observed Sam Weller, hoisting the aunt into a chair. 'Now, depity Sawbones, bring out the wollatilly!' (Sam Weller, XLVIII, 674)
6. 'This here is the dockyment, Sammy,' said Mr. Weller. (Tony Weller, LV, 769)
7. '...and all the rest o' my property, of ev'ry kind and description votsoever to my husband, Mr. Tony Veller, who I appint as my sole eggzekiter.' (Tony Weller, LV, 770)
8. '...it's wery likely as I shall continey to be a night coach till I'm took off the road altogether.' (Tony Weller, XLV, 637)
9. 'Fine sleeping place-within ten minutes' walk of all the public offices-only if there is any objection to it, it is that the sitivation's rayther too airy....' (Sam Weller, XVI, 210)

10. 'I'm actiually drove out o' house and home by it.' (Tony Weller, LII, 735)

1.4.2.2. [ju:]音 [au]音 (Change of [ju:] to [au])

この音変化については、Gerson は J.R.Lowwell という学者から次のように引用している。"I obtained from three cultivated Englishmen at different times three diverse pronunciation of a single word, --*cowcumber*, *coocumber*, and *cucumber*."⁵⁹⁾ ということ、一時期は教養ある人でも三通りの発音をしていたということになる。その中から *cucumber* だけが現在の標準英語の発音になって来たのである。PP からは下の一例のみである。

1. 'I was afeerd, from his manner, that he might ha' forgotten to take pepper vith that 'ere last cowcumber he eat.' (Sam Weller, XLV, 633)

1.5. その他の音変化 (Miscellaneous)

1.5.1. 音位転換 (Metathesis)

この音変化は、一言で言えば日本語の「茶がま」が時折間違えられて「茶まが」と発音される現象である。Matthews は "metathesis of *r* is another common Cockneyism which has a long history. The Cockney pronunciations *purtest*, *perdooce*, *childern*, *hunderd*, *permisc'ous*, etc...."⁶⁰⁾ と述べているように、ロンドン方言の中でも長い歴史を持っている特徴の一つに数えられるだろう。参考までに Matthews の中の例を標準英語化すると、*purtest* は *protest*, *perdooce* は *produce*, *childern* は *children*, *hunderd* は *hundred*, *permisc'ous* は *promiscuous* となる。PP からは下の例が見られる。1 の *perfer* が *prefer*, 2 の *purfession* が *profession*, 3 の *properiator* が *proprietor*, 4 の *perportion* が *proportion*, 5 の *purwidin'* が *providing*, 6 の *perwoked* が *provoked*, 7 の *perwent* が *prevent* を表している。

1. '...and I'm still more obliged to the other gen'l'm'n, who looks as if he'd just escaped from a giant's carrywan, for his 'ansome suggestion; but I should perfer your givin' me a answer to

my question,....' (Sam Weller, XXIV, 336)

2. 'as well as for the other kind and gen'rous people o' the same purfession,....' (Sam Weller, XXVI, 362)

3. 'I've only got to say this here,' said Sam, stopping short, 'that if I was the properiator o' the Markis o' Granby, and that'ere Stiggins came and made toast in my bar,....' (Sam Weller, XXVII, 373)

4. 'My dear,' said Sam, sliding up with an air of great respect, 'you'll spile that wery pretty figure out o' all perportion if you shake them carpets by yourself. Let me help you.' (Sam Weller, XXXIX, 547)

5. 'Wot! Has he been a purwidin' for you?' asked Sam, emphatically. (Sam Weller, XLV, 642)

6. 'Don't talk to me, don't, you brute, for fear I should be perwoked to forgit my sect and strike you!' said Mrs. Raddle. (Mrs. Raddle, XLV, 647)

7. '...come what come may; and let ev'rythin' and ev'rybody do their wery fiercest, nothin' shall every perwent it!' (Sam Weller, LVI, 789)

1.5.2. 発音綴り (Phonetic Spelling)

今までは標準英語と異なる綴りが方言の発音を表す場合を見てきたが、ここでは異なる綴りであってもそれが標準英語の発音を表している例を扱う。このような場合について Christopher Dean は、"It is the appeal to the eye made by the mis-spelling, with its appearance of abnormality, that suggests local dialect rather than any phonetic value that it might have."⁶¹⁾と述べて、「このようなミススペリングは音価を示すものではなく、読者の目に方言であることを訴えているものである」と指摘している。この用法について G.L.Brook は"eye-dialect"という語を用いて、"The mis-spelling does not represent a vulgar pronunciation, but simply a more phonetic representation of normal English."⁶²⁾と述べており、この綴りはあくまで普通の発音を表しているのである。だからこれは、発音通りの綴りということで「発音綴り」(Phonetic Spelling)と呼ばれることもある。この用法は英語が発音と綴り字が大きく乖離してために生じるものである。以下に PP からの例を幾つか挙げておく。1

の *wen* の正しい綴りは *when*, 2 の *wot's* は *what's*, 3 の *werever* は *wherever*, 4 の *macheen* は *machine*, 5 の *obstinit* は *obstinate* となる。

1. '-Belle Savage," says my father; for he stopped there wen he drove up, and he know'd nothing about parishes, he didn't. ...' (Sam Weller, X, 121)
2. "Hallo,; said that eccentric functionary, 'furniter's cheap where you come from, sir. Self-acting ink, that 'ere; it's wrote your mark upon the wall, old gen'lm'n. Hold still, sir; wot's the use o' runnin' arter a man as has made his lucky, ...' (Sam Weller, X, 131)
3. '... as they knows how to reward merit werever they meets it. Besides wich, it's affectin' to one's feelin's.' (Sam Weller, XXXI, 422)
4. '...and brighter colours than ever a likeness was took by the profeel macheen (wich p'raps you may have heerd on Mary my dear) although it does finish a portrait and put the frame and glass on complete, ...' (Sam Weller, XXXIII, 454)
5. '...wot do you persevere in bein' obstinit for, vastin' your precious life away in this here magnified pound?' (Sam Weller, XLIV, 619)

2. 語彙 (VOCABULARY)

ウェラー親子の言葉の中には、特に地域的なロンドン方言に限られた語彙はないが、*OED* の中に *slang* や *dialect* と表示してある語彙を幾つか見てみる。

2.1. 名詞 (Nouns)

先ず名詞では、*cove* という語が何回か使われている。*OED* では「元々は盗賊の隠語で、"*a fellow, chap*" (奴)」という意味であることが記されている。PP には次の例がある。

1. 'Touts for licences,' replied Sam. 'Two coves in white aprons--touches their hats wen you

walk in--"Licence, sir licence?" Queer sort, them, and their mas'rs too, sir-Old Baily Proctors-and no mistake.' (Sam Weller, X, 121)

同じような「奴」という意味を表すのに、次のような *codger* という語も使われている。OED には "*dial. and colloq.*" (方言と口語で) というコメントがある。

2. 'Nor more you have, old codger,' replied the son. 'How's mother-in-law?' (Sam Weller, XX, 270)

また、「現金」を表すのに *blunt* という語が使われている。OED では、"*slang. Ready money.*"と説明されている。OED の初例が 1812 で最終例が 1845 となっているので、19 世紀中頃に流行った語であろう。

3. '...Down he goes to the Commons, to see the lawyer and draw the blunt--wery smart-top-boot on....' (Sam Weller, X, 121)

2.2. 形容詞 (Adjective)

次に形容詞では、「変わった」という意味を表す *rum* という語がよく使われている。OED は、"*slang. Odd, strange, queer. Also bad, spurious.*"と説明している。

1. 'Rum feller, the hemperor,' said Mr. Weller, as he walked slowly up the street. (Sam Weller, XVIII, 246)

2. 'Here's a rather a rum go. sir.' Replied Sam. (Sam Weller, XXXV, 493)

ウェラー親子の言葉に、*afraid* と同じ意味と用法でよく使われている *afeared* (訛って *afeerd*) という語がある。これは元々の *afear* (怖がらせる) という語の過去分詞が形容詞になった形である。動詞としての用法は OED では、最終例が 1596 年、形容詞としては、1868 年まで使われてる。語彙としては、かなり古い用法が残っているものである。

3. 'Uncommon,' replied Sam; 'I never see men eat and drink so much afore. I wonder they a'nt afeerd o' bustin.' (Sam Weller, XIII, 166)
4. 'I'm afeerd there's a orkard gen'l'm'n in 'em, sir,' replied Sam. (Sam Weller, XXX, 411)
5. '... as the wery turkey remarked wen the farmer said he was afeerd he should be obliged to kill him for the London market.' (Tony Weller, XXXIII, 451)

2.3. 前置詞 (Preposition)

次に前置詞では、between の意味を表す *atween* という語が多く見られる。古くは副詞としての用法もあったが、*OED* では 1596 年が最終例となっている。*OED* は、"*arch. and dial. prep. Between.*"と説明して、古語と方言の用法であることをコメントしている。

1. '... and is a dinkin' brandy neat, vile the t'other one-him in the barnacles-has got a barrel o' oysters atween his knees, ...' (Sam Weller, XXX, 407)
2. '...it 'ud ha' been a wery great accommodation to me if I could ha' done it, and 'ud ha' saved a good many vords atween your mother-in-law and me, sometimes....' (Tony Weller, XLV, 632)

2.4. 動詞 (Verb)

次に動詞で、「だます、ごまかす」という意味の *gammon* という語が見られる。*OED* は、"*slang or colloq.*"とし、俗語か口語の用法であることを述べている。下の 1 が *OED* の例文に挙げられている。

1. 'So then they pours him out a glass of wine, and gammons him about his driving, and gets him into a reg'lar good humor, and at last shoves a twenty-pound note in this hand.' (Sam Weller, XIII, 167)
2. 'I'm wery sorry, Sammy, to hear from your lips, as you let yourself be gammoned by that 'ere mulberry man....' (Tony Weller, XXII, 314)

さらに *flummox* という動詞が見られる。これは下の PP の例が *OED* の初例となっている。*OED* は、"Flummox: *colloq. or vulgar* 1. *trans.* To bring to confusion; to 'do for', cause to fail; to confound, bewilder, nonplus."と解説して、口語や俗語の用法で、「困惑・当惑させる」という意であることを述べている。PP に下の一例だけ出てくる。

3. '...And my 'pinion is, Sammy, that if your governor don't prove a alleybi, he'll be what the Italians call reg'larly flummoxed, and that's all about it.' (Tony Weller, XXXIII, 455)

2.5. 接続詞 (Conjunction)

次に接続詞で、before の意味を表す *afore* という語が多く使われている。*OED* に依るとこの接続詞 *afore* は、元々は時を表わす前置詞 *afore* から派生して来た用法である、と説明している。即ち例えば、*afore the time that he came* の *the time* が省略されて、*afore that he came* となり、さらに *that* が省略されて *afore he came* となったのである。*OED* は "*arch. and dial.*" とコメントしている。

1. 'Afore I answers that 'ere question, gen'l'm'n,' replied Mr. Weller, 'I should like to know, in the first place, whether you're a goin' to purvide me with a better?' (Sam Weller, XII, 154)

2. 'You may say that. Arter I run away from the carrier, and afore I took up with the vagginer, I had unfurnished lodgin's for a fortnight.' (Sam Weller, XVI, 209)

次に接続詞の *nor* が *than* の意で用いられている用法がある。*OED* は、"*Nor: conj. Sc. and dial.* [Of obscure origin: cf. NA conj.] *Than.*" と説明し、語源がハッキリしない、スコットランド語や方言の用法である、と述べている。

3. '... "Not know!" says the lawyer.--"No more nor you do," says my father, ...' (Sam Weller, X, 122)

4. 'You're far worse nor Dodson, sir, and as for Fogg, I consider him a born angel to you!' (Sam Weller, XXXVIII, 542)

3. 文法 (GRAMMAR)

3.1. 名詞 (Noun)

3.1.1. 複数形 (Plural Form)

ここで扱うのは名詞の数 (number) に関するものである。即ち、標準英語では複数形を用いるところで、単数形が使われている場合がある。これは OE (古英語) の古い用法の名残である。今では数・量などを表す時だけ、方言や俗語で見られるものである。下の例の下線部の名詞は標準英語では当然 *-s* が付くところである。(但し、2 の *foot* は変則的に *feet* となる。)

1. 'There's a wooden leg in number six; there's a pair of Hessians in thirteen; there's two pair of halves in the commercial; there's these here painted tops in the snugery inside the bar; and five more tops in the coffee-room.' (Sam Weller, X, 125)
2. '...So now they has two ropes, 'bout six foot apart, and three from the floor, which goes right down the room;....' (Sam Weller, XVI, 210)
3. "Yes, he's a havin' two mile o' danger at eight-pence," replied the son. (Sam Weller, XXII, 297)
4. 'Why, sir, bless your innocent eyebrows, that's where the mysterious disappearance of a 'spectable tradesman took place four year ago.' (Sam Weller, XXXI, 423)
5. '...good -vill, stock, and fixters, vill be sold by private contract; and out o' the money, two hundred pound, agreeable to a rekvest o' your mother-in-law's to me a little afore she died' (Tony Weller, LII, 736)

3.1.2. 人称代名詞 (Personal Pronoun)

俗語や口語では人称代名詞の目的格が主格としてよく使われる。Brook は、"The objective case of personal pronouns is sometimes used for the subjectives, especially when

coupled with a noun."⁶³⁾ (p.244)と述べて、この用法が特に人称代名詞が他の名詞と一緒に用いられる時に起こると指摘している。下の例では、1 ~ 2 が他の名詞と共に使われているもの、3 ~ 4 が単独で使われているものである。

1. '..."Well, ma'am," says he, "then I've just looked in to say that me and my family ain't a goin' to be choked for nothin';' (Sam Weller, XXXI, 424)
2. 'Me and cab'net-maker has dewised a plan for gettin' him out.' (Tony Weller, XLV, 638)
3. '..., and is a dinkin' brandy neat, vile the t'other one--him in the barnacles--has got a barrel o' oysters atween his knees,' (Sam Weller, XXX, 407)
4. 'Him as drives a Ipswich coach, and uses our parlour,' rejoined the boy. (a messenger boy, XXXIII, 448)

3.1.3. 所有代名詞 (Possessive Pronoun)

サムという言葉の中に、二人称の所有代名詞 yours が *your'n* (又は *yourn*) となる用法が幾つかある。Brook は、"In substandard speech, as in many dialeets of the Midlands and South, variant forms of the possessive pronouns with a final *-n* are often found when the pronouns are not used attributively."⁶⁴⁾ と述べて、yours の異形として中南部の方言に多く、特に名詞の前に置かれない限定用法の時にしばしば見られることを指摘している。下のサムからの用法も全て「名詞 + of + your'n」の形である。何故このような異形が出てくるのかについては Matthews が、"The Cockney possessive pronouns are all modelled on 'mine'."⁶⁵⁾ と説明して、*yourn* は (中には *ourn* も) mine になって出てきた形である、と指摘している。

1. '...Bring them 'ere eyes o' your'n back into their proper places, or I'll knock 'em out of your head. D'ye hear?' (Sam Weller, XXIII, 317)
2. 'Well, let him, if he likes,' replied Sam, 'it ain't no bis'ness o' yourn.' (Sam Weller, XXXIII, 457)
3. '...you must not give way to that 'ere uncompromisin' spirit o' your'n.' (Sam Weller, XXXVII, 518)

3.1.4. 再帰代名詞 (Reflexive Pronoun)

三人称単数と複数の再帰代名詞、*himself* と *themselves* はウェラー親子の言葉では、全て *hisself*, *theirselves* となっている。Matthews は、"For the reflexives 'hisself' and 'theirselves', the Cockney substitutes forms modelled on 'myself'."⁶⁶⁾ と述べて、これも前節の所有代名詞 *yourn* と同じように *myself* からの類推から出てきたものである、と説明している。下の例では 1 ~ 2 が *hisself*、3 ~ 4 が *theirselves* の例である。

1. '... If that 'ere secretary fellow keeps on for only five minutes more, he'll blow hisself up with toast and water.' (Tony Weller, XXXIII, 457)
2. '...for he drank hisself to death in somethin' less than a quarter.' (Sam Weller, XXXVII, 519)
3. '...wot I say is this; that wenever they feels theirselves gettin' stiff and past their work, they just rides off together,....' (Sam Weller, LI, 715)
4. 'Them things as is always a fluctooatin', and gettin' theirselves involved somehow or another vith the national debt,....' (Tony Weller, LII, 736)

3.1.5. 関係代名詞 (Relative Pronoun)

俗語では *as* がさまざまな用法として多用されている。先ず関係代名詞としての用法について Brook は、"*As* is used as relative with the meaning 'who', 'whom' or 'which'."⁶⁷⁾ と述べてるように、*as* は先行詞が人であろうと物であろうと、主格であろうと目的格であろうと全てに使われるのである。いわば、これ一つで足りる関係代名詞の万能選手のようなものである。下の例では、1 ~ 3 は主格の *who* の代わりに、4 ~ 6 は主格の *which* の代わりに使われている場合である。

1. 'Wery fresh,' replied Sam; 'me, and the two waiters at the Peacock, has been a pumpin' over the independent woters as supped there last night.' (Sam Weller, XIII, 166)
2. '...to hocus the brandy and water of fourteen unpolled electors as was a stoppin' in the

house.' (Sam Weller, XIII, 166)

3. Wen the lady and gen'l'm'n as keeps the Hot-el first begun business they used to make the beds on the floor; but this wouldn't do at no price,....' (Sam Weller, XVI, 210)

4. 'Look at these here boots-eleven pair o' boots; and one shoe as b'longs to number six, with the wooden leg.' (Sam Weller, X, 119)

5. '...take the box as stands in the first fire-place,....' (Sam Weller, XX, 269)

6. 'The gout, sir,' replied Mr. Weller, 'the gout is a complaint as arises from too much ease and comfort.' (Tony Weller, XX, 273)

3.2. 形容詞 (Adjective)

3.2.1. 指示形容詞 (Demonstrative Adjective)

ウェラー親子の言葉の中にはしばしば、指示形容詞 *this* が *this here*、その複数形 *these* が *these here*、さらに *that* が *that 'ere*(=*there*)になる用法が見られる。何故か *that* の複数形 *those there* (?)の形は見られない。この用法について Brook は、"*This here, these here, and that 'ere* are often used as emphatic forms of the demonstrative adjectives. The form *'ere* is probably from *there*, with the initial *th* first assimilated to the final *t* of the preceding word and with the resulting *tt* then simplified. These forms are particularly common in the speech of Sam Weller."⁶⁸⁾ と述べて、強調のための用法であり、サムには特徴的に多いことを指摘している。下の 1 ~ 3 まだが *this here*、4 ~ 5 が *these here*、6 ~ 7 は *that there* の例である。

1. '...but wen I gets on this here grievance, I runs on like a new barrow with the wheel greased.' (Sam Weller, X, 122)

2. ...'if I can get a talk with this here servant in the mornin',' (Sam Weller, XVI, 211)

3. '...arter all I've said to you upon this here wery subject; arter actiwally seein' and bein' in the company o' your own mother-in-law,....' (Tony Weller, XXXIII, 451)

4. 'Look at these here boots-eleven pair o' boots; and one shoe as b'longs to number six, with the wooden leg.' (Sam Weller, X, 119)

5. '...We're all wery fond o' you, Mr. Weller, so in case you should have an accident when

you're a bringing these here woters down,....' (Sam Weller, XIII, 167)

6. '... and put 'em under the pump, and they're in reg'lar fine order, now. Shillin' a head the committee paid for that 'ere job.' (Sam Weller, XIII, 166)

7. 'Wot I like in that 'ere style of writin',' said the elder Mr. Weller, 'is, that there ain't no callin' names in it,' (Tony Weller, XXXIII, 453)

また同じ指示形容詞として、人称代名詞の *them* が *that* の複数形 *those* の代わりに使われている。*that there* の用法で複数形の *those there* の用法がないのは、*them* がその代わりをしているからかも知れない。Matthews も "The demonstrative pronouns 'this', 'that', and 'those' are replaced frequently by 'this here', 'that there', and 'them'."⁶⁹⁾ と述べて、*those* は *them* となることを指摘している。

8. 'All them old cats will run their heads agin mile-stones,' observed Mr. Weller in a parenthesis. (Sam Weller, XII, 154)

9. '...They're all made o' them noble animals," says he,....' (Sam Weller, XIX, 255)

10. '...What's in them stone jars, young touch-and-go?' (Sam Weller, XIX, 255)

11. 'Then I know where they are, and that's all about it,' said Mr. Weller; 'they're at Ipswich, safe enough, them two.' (Tony Weller, XX, 272)

3.2.2. 比較級と最上級 (Comparative & Superlative)

俗語では強調するために、二重比較級・最上級と呼ばれているものを使う場合がある。この用法について Brook は、"Double comparatives and superlatives of adjectives are formed by adding the *-er* or *-est* suffix to a form that is already comparative or superlatifve and by using the word *more* with the comparative form of the adjective."⁷⁰⁾ と述べている。つまり、既に比較級や最上級の形になっているのにさらに比較級や最上級の形を作って、比較級や最上級を重ねてしまうのである。次の例は、1 では既に比較級の形 *worse* に比較級語尾 *-er* を付け、2 と 3 すでに比較級の形にさらに *more* を付け、4 では既に最上級の形にさらに *most* を付けて強調している。

1. 'You might ha' made a worser guess than that, old feller,' replied Mr. Weller the younger, (Sam Weller, XXII, 297)
2. 'Vell p'raps it is a more tenderer word,' said Mr. Weller, after a few moments' reflection. (Tony Weller, XXXIII, 453)
3. '...you're a wery kind-hearted man, and I might ha' made your home more comfortabler.' (Tony Weller, LII, 733)
4. '...you injure me in one of the most delicatest points in which one man can injure another ...' (Mr. Muzzle, XXV, 352)

また Brook が、"In standard English comparison of adjectives by addition of the suffixes -er and -est is normally restricted to short adjectives, but in substandard speech these suffixes are used more freely."⁷¹⁾ と述べているように、標準英語では比較級・最上級を作るのに、形容詞の音節が三音節以上になると *more* や *most* を付けるのが一般的であるが、俗語ではそれらにとらわれずもっと自由に、三音節以上の長い語にも *-er* や *-est* を付ける傾向がある。PP には下のトニーからの一例だけが見られる。

1. 'Remarkably so indeed,' replied Mr. Pickwick. 'Very seasonable.'
'Seasonablest veather I ever see, sir,' rejoined Mr. Weller. (Tony Weller, LVI, 783)

3.3. 副詞 (Adverb)

3.3.1. 単純形副詞 (Flat Adverb)

俗語では形容詞を副詞として使う時、*-ly* を付けなければならないところでもそのまま形容詞形を使う場合がある。この用法について Brook は、"Adjectives are used adverbially because loss of final *-e* in pronunciation had blurred the distinction between many adjectives and corresponding adverbs."⁷²⁾ と述べて、歴史的に形容詞の最後の語尾 *-e* の発音が曖昧になって来て形容詞と副詞の違いがつかなくなったことを説明している。また、市河三喜博士は「いわゆる intensive adverbs は俗語では普通 *-ly* のない形を用いている」⁷³⁾ と述べて、通常の副詞と強調の副詞を分けている。下の例では、1 ~ 3 が強調の副詞 (Intensive Adverb) で、4 ~ 9 が通常の副詞の例である。

1. '... , that as she was such an uncommon pleasant wider,' (Tony Weller, XX, 271)
2. '..."At last he began to get so precious jolly, that he used to forget how the time vent,"....' (Sam Weller, XL, 578)
3. "He's a devilish pleasant gentlemanly dog,' said Mr. Smangle;--'infernal pleasant. I don't know anybody more so....' (Mr. Smangle, prisoner, XLI, 584)
4. "Then you can arrange what's best to be done, sir, and we can act acording.' (Sam Weller, XVI, 212)
5. '...I takes it reg'lar, and I can warrant it to drive away any illness as is caused by too much jollity.' (Tony Weller, XX, 273)
6. 'I'd come down wery handsome towards strait veskits for some people at home.' (Sam Weller, XVII, 370)
7. '...and is a dinkin' brandy neat, vile the t'other one-him in the barnacles-has got a barrel o' oysters atween his knees,' (Sam Weller, XXX, 407)
8. 'Leave off rattlin; that 'ere nob o' yourn,...., and behave reasonable.' (Sam Weller, XLII, 607)
9. 'His appetite is wery so-so, but he imbibes wonderful.' (Tony Weller, XLII, 607)

3.3.2. 副詞語尾-S (Adverbial Ending -s)

この用法について市河三喜は、「Adverb で-s で終わるものが幾つかある。もとは"needs", "always", "now-a-days"のように名詞の genitive case で、adverb に転用されたのもであるが、後に adverb を作る suffix のように思われ、はなはだしいのは "whereabouts", "thereabouts"のように本来の adverb にまで-s をつけて用いられることさえある」⁷⁴⁾と述べている。そこで PP には下の例のように、この本来の副詞にまで-s を付けているものが三例見られる。2 の *anyveres* は anywhere、3 の *noveres* は nowhere がそれぞれ訛った形である。

1. '...I should like to see you at the Great White Horse to-night, somewheres about eight o'clock.' (Sam Weller, XXIII, 320)

2. 'In short, Sammy, I feel that I ain't safe anyveres, but on the box.' (Tony Weller, LII, 735)
3. 'I'm a goin' to vork a coach reg'lar, and ha'nt got noveres to keep it in,' (Tony Weller, LVI, 785)

3.4. 接続詞 (Conjunction)

俗語では *as* が接続詞として使われるものがある。OED では、"*As*, sense B28 Introducing a noun sentence after *say*, *know*, *think*, etc. Sometimes expanded into *as that*. *Obs.* and replaced by *that*, but still common in southern dialect speech..."と説明されている。つまり、標準英語では *that* にとって代わられたが、今でも南部地方の方言で使われている用法で、特に動詞の *say*, *know*, *think* などの後の名詞節を導く場合に使われることを指摘している。下の PP からの例は、1 が *hear*, 2 が *say*, 3 が *know'd* の目的となる名詞節を導いている。ただし、4 は前の三例とは違って仮目的語の *it* の内容を表す名詞節を導いている場合である。

1. 'I'm wery sorry, Sammy, to hear from your lips, as you let yourself be gammoned by that 'ere mulberry man.' (Tony Weller, XXII, 314)
2. '...Thirdly, to say as all his things is to be put together, and give to anybody as we sends for 'em.' (Sam Weller, XXVI. 360)
3. 'I thought everybody know'd as a Sawbones was a Surgeon.' (Sam Weller, XXX, 406)
4. 'It's just possible as exhausted nature may manage to survive it.' (Sam Weller, XXXV, 499)

3.5. 動詞 (Verb)

3.5.1. 動詞活用 (Conjugation)

動詞の活用に関しては、PP には標準英語とは異なった四つのパターンの活用の仕方が見られる。先ず一つ目は、過去形に現在形を使っている場合である。下の例では、*see* の過去形に *saw* ではなくそのまま現在形の *see* を使っている。

1. 'Uncommon,' replied Sam; 'I never see men eat and drink so much afore. I wonder they a'nt afeer'd o' bustin.' (Sam Weller, XIII, 166)
2. 'Why, no con-siderable change has taken place I the state of my system, since I see you cocked up behind your governor's chair in the parlour, a little vile ago,' replied Sam. (Sam Weller, XXV, 349)
3. 'I never see such a sensible sort of man as he is, or such a reg'lar gen'l'm'n.' (Sam Weller, XXVIII, 390)

二つ目は、過去形に過去分詞形を使っている場合である。下の例では、begin の過去形に *began* ではなく過去分詞形の *begun* を使っている。

4. 'Wen the lady and gen'l'm'n as keeps the Hot-el first begun business they used to make the beds on the floor; but this wouldn't do at no price,....' (Sam Weller, XVI, 210)

三つ目は、不規則変化動詞を規則変化させている場合である。これは不規則変化する強変化動詞を、弱変化動詞からの類推で規則変化させているのである。下の例で、5 では *see* の過去形に *saw* ではなく *seed*, 6 では *hear* の過去形に *heard* ではなく *heerd*, 7 では *lie* の過去分詞に *lain* ではなく *lied*, 8 では *know* の過去分詞に *known* ではなく *know'd*, 9 では *draw* の過去分詞に *drawn* ではなく *draw'd*, 10 では *throw* の過去分詞に *thrown* ではなく *throw'd*, 11 では *blow* の過去分詞に *blown* ではなく *blowed* を使っている。

5. '...for he blowed the bird right clean away at the first fire, and nobody ever seed a feather on him arterwards.' (Sam Weller, XIX, 256)
6. '...and, more than that, as they sat in front, right behind the box, I heerd 'em laughing,' (Tony Weller, XX, 272)
7. '...and then the shepherd began to preach: and wery well he did it, considerin' how heavy them muffins must have lied on his chest.' (Tony Weller, XXII, 298)
8. 'I ought to ha' know'd better, I know,' said Sam. (Sam Weller, XXIII, 314)
9. 'or else he'd been draw'd into the ingine;' (Sam Weller, XXXI, 424)

10. 'P'raps he might ha' throw'd a small light on that 'ere liver complaint as we was a speakin' on, just now.' (Sam Weller, XLIII, 608)

11. 'Set down, sir; ve make no extra charge for the settin' down, as the king remarked wen he blowed up his ministers.' (Sam Weller, XLV, 633)

四つ目は、過去分詞に過去形を使っている場合である。下の例で、12 では forget の過去分詞形に *forgotten* ではなく *forgot*, 13 では break の過去分詞に *broken* ではなく *broke*, 14 では take の過去分詞に *taken* ではなく *took*, 15 では write の過去分詞に *written* ではなく *wrote* を使っている。

12. 'If it hadn't been sor this, I should ha' forgot all about, till it was too late!' (Sam Weller, XXXIII, 449)

13. '... I hope that 'ere trial hasn't broke his spirit, but it looks bad, wery bad.' (Sam Weller, XXXV, 494)

14. '...as the young gen'l'm'n observed ven he was took with fits.' (Sam Weller, XXXVII, 517)

15. 'It's wrote on gilt-edged paper,' said Sam, as he unfolded it,' (Sam Weller, XXXVII, 517)

3.5.2. 仮定法 (Subjunctive)

標準英語では仮定法過去形の if 節の中の be 動詞は *were* が使われるが、俗語や口語では *was* となる。下にその例を挙げておく。

1. '...'T'an't so handsome that you need keep waving it about, as if you was a tight-rope dancer.' (Sam Weller, XVI, 216)

2. '...and grind it into sassage as easy as if it was a tender young babby.' (Sam Weller, XXXI, 423)

3. 'only I wouldn't show that wery fine edge too much, if I was you, in case anybody took it

off.' (Sam Weller, XXXIII, 448)

3.6-. 接頭辞 (Prefix)

下の例から分かるように、反対の意を表す接頭辞に間違ったものを使用している場合がある。OEDはこの語について、"Now only *dial.* Very common c1400--1660."と述べて、今は方言のみだが、約 1400 年から 1660 年ごろまでは、ごく普通の用法であったことを指摘している。

1. 'Quite unpossible to identify any gen'l'm'n vith any degree o' mental satisfaction, vithout lookin' at him, sir,' replied the voice, dogmatically. (Sam Weller, XXXVIII, 541)

4. 統語論 (SYNTAX)

4.1. 一致 (Concord)

4.1.1. 主語と動詞の一致 (Concord Between Subject & Verb)

標準英語では主語の数と動詞の形が一致するが、俗語では単数形の主語に動詞の複数形が対応したり、複数形の主語に動詞の単数形が対応したりする。PP では後者の「複数形の主語に単数の動詞形が対応」している場合が比較的多く見られる。この用法について Brook は、"There are many examples of lack of concord between the subject of a sentence and its verb. The verb 'to be' is particularly subject to variation...In other verbs apparent examples of false concord are the result of the extension of the third person singular ending to other persons of the singular and to the plural."⁷⁵⁾と述べているように、Be 動詞にこの用法が多く、その他の一般動詞の場合には、どんな主語に対しても動詞は三人称単数の形が多く見られる。下の例では、1 ~ 3 までが Be 動詞の例である。3 ではまれに単数の主語に複数形の Be 動詞 warn't (=weren't)が対応している。

1. 'Why, then,' said the boy, 'you was to come to him at six o'clock to hour 'ouse,' (a messenger boy, XXXIII, 448)
2. '..."Other people is," says he,' (Sam Weller, XIX, 255)
3. '...The red-nosed man warn't by no means the sort of person you'd like to grub by contract, but he was nothin' to the shepherd.' (Tony Weller, XXII, 298)

次の4～9までは、Have 動詞と一般動詞の例であるが、主語が単数の I, You や複数の They や women であろうと、動詞は三人称単数形である。

4. '...but wen I gets on this here grievance, I runs on like a new barrow with the wheel greased.' (Sam Weller, X, 122)
5. 'I takes my determination on principle, sir,' remarked Sam, 'and you takes yours on the same ground;....' (Sam Weller, XLIV, 615)
6. 'You don't see the reg'lar wagrants there; trust 'em, they knows better than that.' (Sam Weller, XVI, 210)
7. '...So then they pours him out a glass of wine, and gammons him about his driving,' (Sam Weller, XIII, 167)
8. 'So now they has two ropes, 'bout six foot apart,' (Sam Weller, XVI, 210)
9. "What do you think them women does t'other day,' continued Mr. Weller, (Tony Weller, XXII, 297)

4.1.2. 冠詞と名詞の一致 (Concord Between Article & Noun)

一例だけ下ののように複数名詞に不定冠詞 *a* が付いているものがある。

1. 'I worn't always a boots, sir,' said Mr. Weller, with a shake of the head. 'I was a vagginer's boy, once.' (Sam Weller, XVI, 209)

4.2. 現在分詞 (Present Participle)

サムという言葉の中には、動詞の現在分詞形の前に a が付いている奇妙な形が見られる。この用法については Brook は、"There were much confusion in Middle English between the verbal noun in *-ing* and the present participle. There are survivals of this confusion in substandard speech in the use of the prefix *a-* (a weakened form of the preposition *on*) with present participles of verbs used transitively. When the form in *-ing* is both preceded by *a-* and followed by the preposition *of*, it can best be regarded as a verbal noun."⁷⁶⁾ と述べている。即ち、俗語に見られる、現在分詞の前に付いている *a-* は中期英語時代、動名詞と現在分詞が混同されていたことの名残りである。つまり現在分詞なら何も付かないのだが、動名詞の場合は前に前置詞の *on* (これが後に *a-* と弱形化される) と後ろに前置詞の *of* が付いていたのであった。この古い時代の混同がロンドン方言の俗語の中に残っているのである。下の例では、1 ~ 3 が現在分詞の前に *a* だけがある場合、4 ~ 5 が前に *a* と後に *of* の両方が付いている場合である。

1. 'No, no; reg'lar rotation, as Jack Ketch said, wen he tied the men up. Sorry to keep you a waitin', sir, but I'll attend to you directly.' (Sam Weller, X, 119)
2. 'Reg'lar game, sir,' replied Mr. Weller; 'our people's a col-lecting down at the Town Arms, and they're a hollering themselves hoarse already.' (Sam Weller, XIII, 166)
3. 'At last, one day the old gen'l'm'n was a rollin' along, and he sees a pickpocket as he know'd by sight, a-comin' up, arm in arm vith a little boy vith a wery large head.' (Sam Weller, XXVIII, 391)
4. 'Why we were that wery moment a speaking of you. How are you?' (Sam Weller, XXV, 351)
5. '...there's no knowin' vere to have 'em; and vile you're a-considering of it, they have you.' (Sam Weller, LVI, 787)

4.3. 前置詞 (Preposition)

サムという言葉の中には、明らかに他動詞なのにその後に前置詞 *of* が付いている場

合がある。この不要な *of* の用法については Brook も、"Some verbs are constructed with *of* although in standard English they are used without a preposition."⁷⁷⁾ と述べているだけで、その理由は明らかにされていない。推測できることは、下の PP からの例で全ての動名詞形に *of* が付いているので、前節で見た現在分詞詞に *of* を付けていた習慣から他動詞の動名詞にも *of* を付けているのではないかと思われる。

1. '... and should tip 'em over into the canal without huritin' of 'em, this is for yourself," says he--....' (Sam Weller, XIII, 168)
2. 'Arter wich she keeps on abusin' of him for half an hour,' (Sam Weller, XXXI, 423)
3. 'Feel myself ashamed and completely circumscribed in a dressin' of you, for you are a nice gal and nothin' but it.' (Sam Weller, XXXIII, 453)

さらにウェラー親子の言葉の中に、前置詞の *of* が *on* に入れ替わっている場合がある。この用法に対して Brook は、"The preposition *of* is often replaced by *on*, especially before pronouns or at the end of a sentence. Confusion between the two prepositions is old and there are many examples in Shakespeare."⁷⁸⁾ と述べて、この用法がシェイクスピア時代からの、前置詞の *of* と *on* の混同に由来するものであることを示唆している。

1. 'It cert'nly seems a queer start to send out pocket ankerchers to people as don't know the use on 'em,' observed Sam. (Sam Weller, XXVII, 370)
2. '...And if he ain't got enough out on 'em, Sammy, to make him free of the water company for life,' said Mr. Weller, (Tony Weller, XVII, 370)
3. 'And one on 'em,' said Sam, not noticing his master's interruption, 'one on 'em's got his legs on the table,' (Sam Weller, XXX, 407)
4. 'That's wery kind on 'em,' replied Sam. (Sam Weller, XXXVII, 520)
5. 'That he wouldn't, if he was aware on it; but there were so many on 'em, that he hardly know'd which was the best ones wen he heerd 'em mentioned.' (Sam Weller, XXXIX, 545)
6. 'Praps he might ha' throw'd a small light on that 'ere liver complaint as we wos a speakin' on, just now.' (Sam Weller, XLIII, 608)

7. 'Don't you see any vay o' takin' care on him?' (Sam Weller, XLIII, 608)
8. 'Wot! Is she so wery fond on you?' inquired Sam. (Sam Weller, LII, 734)

4.4. 多重否定 (Multiple Negation)

俗語では、否定を強めるために2回重ねたり(二重否定)、それ以上重ねたり(多重否定)する。この用法について Matthews は、"The mathematical axiom that the multiplication of two negatives results in a positive has never recommended itself to Cockneys. They incline to use negatives emphatically and not logically."⁷⁹⁾ と述べて、「否定の否定は肯定になるという数学の命題はコックニーには通用せず、彼等は論理的ではなく、強意的に否定を重ねる」と説明している。また Brook は、"Double negatives are very common, as they are in early English and in many regional dialects."⁸⁰⁾ と述べて、その起源が英語の古い時代の古英語や中英語期にあることを指摘している。下の PP からの例では、1 ~ 5 が二重否定、6 ~ 8 が三重否定になっている。

1. '..."she'll have me, if I ask, I des-say-I never said nothing to her, but she'll have me, I know."....' (Sam Weller, X, 122)
2. 'Wen the lady and gen'l'm'n as keeps the Hot-el first begun business they used to make the beds on the floor; but this wouldn't do at no price,....' (Sam Weller, XVI, 210)
3. '...It won't do no good, this won't.' (Sam Weller, XVI, 215)
4. '..."; for there ain't nobody like you, though I like you better than nothin' at all."...' (Sam Weller, XXXIII, 453)
5. 'Don't say nothin' to me,' replied Sam, 'for I can't bear it.' (Sam Weller, XXXIII, 461)
6. 'O' course not,' said Sam, 'and nobody never did, nor never vill neither; and here am I a walkin' about like the wandering Jew....' (Sam Weller, XXXIX, 549)
7. 'I'll send you a box of pills directly, and don't you never take no more of 'em," he says.' (Sam Weller, XLIV, 617)
8. 'I don't see no occasion for nothin' o' the kind sir,' replied Mr. Weller, obstinately. (Tony Weller, LVI, 785)

4.5. 縮約形 (Contraction)

標準英語では人称代名詞の後に Be 動詞 (is, am, are) や Have 動詞 (have, has, had) や助動詞 (will, would) などが続く場合に、I'm, you're, he's のように縮約形を作ることができるが、口語や俗語ではもっと自由な縮約形が見られる。口語の用法について、原沢正喜は『現代口語文法』で「'll, 've, 's 等はもちろん人称代名詞のみに伴うものではなく、who've, which'll, what'd, anybody's, everybody've のような他の代名詞に用いられるのはもちろん、名詞にさえ用いられる」⁸¹⁾と述べているので、この用法は俗語より口語に近いものであろう。実際 Dickens の作品の中でも下層階級の人物に限られた用法ではない。しかしながらサムがかなり多用しているので、彼の言葉の特徴の一つと言えるだろう。下の例では、1 ~ 7 までが助動詞 will, 8 が would の縮約形である。注目すべきは 5 の *you and I'll* で、この例では will は you and I にかかっている、かなり大胆な縮約形であると言えるだろう。

1. 'He wants you particklar; and no one else'll do, as the Devil's private secretary said ven he fetched away Doctor Faustus,' repled Mr. Weller. (Sam Weller, XV, 193)
2. '...if these wery respectable ladies'll have the goodness to retire, and order 'em up, one at a time.' (Sam Weller, XVI, 225)
3. The Governor hissself'll be down here presently.' (Sam Weller, XXII, 297)
4. 'and I hope this here reverend gen'l'm'n'll excuse me saying that I wish I was the Weller as owns you, mother-in-law.' (Sam Weller, XXVII, 367)
5. '...you and I'll go, punctiwal to the time.' (Tony Weller, XXXIII, 456)
6. '...but all I can say is, that I'm not only ready but villiln' to do anything' as'll make matters agreeable;....' (Sam Weller, XXXIX, 552)
7. 'Well,' said Sam, 'you've been a prophecycin' away, about wot'll happen to the gov'nor if he's left alone.' (Sam Weller, XLIII, 608)
8. 'I should ha' s'posed that; but what I mean is, should you like a drop of anythin' as'd warm you?' (Sam Weller, XXVIII, 379)

5. まとめ (CONCLUSION)

さて、今まで『ピクウィック・ペーパーズ』に見られるロンドン方言を登場人物ウェラー親子の言葉を中心に、第一章で音韻の特徴、第二章でその語彙の特徴、第三章でその文法の特徴、第四章でその統語論の特徴を色々な項目毎に詳しく見てみてきた。その結果、地域方言としてのコックニーは[h]音の省略や添加、[v]音と[w]音の入れ替えにその特徴が見られ、コックニーに含まれる階級方言は下層階級のウェラー親子が話す俗語にその特徴が見られることが如実に分かる。恐らく作者は忠実に、ロンドン方言の多彩な用法を再現しているのではないかとと思われる。このロンドン方言を見事にな再現することによって、この物語の人気を作り出したウェラー親子がロンドンを舞台に、所せましとばかりに面目躍如として活躍することができたのではないだろうか。

註 (Notes)

1. 中西俊一 他編、『ピクウィック読本』, (東京図書, 1987), p. viii.
2. *Ibid.*, p. 11.
3. William Matthews, *Cockney Past and Present*, (Routledge & Kegan Paul, 1938), p. 160.
4. Stanley Gerson, *Sound and Symbol*, (Almqvist & Wiksell, 1967), p. 273.
5. *Ibid.*, p. 47.
6. *Ibid.*, p. 63.
7. *Ibid.*, p. 70.
8. *Ibid.*, p. 70.
9. *Ibid.*, p. 88.
10. *Ibid.*, p. 118.
11. *Ibid.*, p. 90.
12. *Ibid.*, p. 8.
13. *Ibid.*, p. 71.

14. *Ibid.*, p. 69.
15. *Ibid.*, p. 114.
16. *Ibid.*, p. 3.
17. *Ibid.*, p. 26.
18. *Ibid.*, p. 59.
19. William Matthews, *op. cit.*, p. 196.
20. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 9.
21. *Ibid.*, p. 127.
22. *Ibid.*, p. 151.
23. *Ibid.*, p. 146.
24. *Ibid.*, p. 139.
25. *Ibid.*, p. 163.
26. William Matthews, *op. cit.*, p. 183.
27. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 183.
28. *Ibid.*, pp. 191-93.
29. *Ibid.*, p. 200.
30. *Ibid.*, p. 204.
31. William Matthews, *op. cit.*, p. 172.
32. *Ibid.*, p. 191.
33. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 245.
34. *Ibid.*, pp. 249-50.
35. *Ibid.*, p. 268.
36. *Ibid.*, p. 269.
37. William Matthews, *op. cit.*, p. 175.
38. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 280.
39. William Matthews, *op. cit.*, p. 175.
40. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 181.
41. *Ibid.*, p. 197.
42. William Matthews, *op. cit.*, p. 81.
43. 市河三喜、『英文法研究』、(研究社,1957)、 p. 276.

44. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 226.
45. *Ibid.*, p. 227.
46. *Ibid.*, p. 214.
47. *Ibid.*, p. 254.
48. *Ibid.*, p. 254.
49. William Matthews, *op. cit.*, p. 177.
50. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 263.
51. *Ibid.*, p. 263.
52. Henry Cecil Wyld, *A History of Modern Colloquial English*, (Basil Blackwell, 1953), p. 180.
53. Stanley Gerson, *op. cit.*, p. 273.
54. *Ibid.*, pp. 273-75.
55. *Ibid.*, p. 323.
56. *Ibid.*, p. 304.
57. *Ibid.*, p. 309.
58. *Ibid.*, p. 313.
59. *Ibid.*, p. 318.
60. William Matthews, *op. cit.*, p. 175.
61. Christopher Dean, "Joseph's Speech in 'Wuthering Heights' ", *Notes and Queries*, N.S. VII. February, 1960, p. 76.
62. G.L. Brook, *The Language of Dickens*, (Andre Deutsch, 1970), pp. 42-43.
63. *Ibid.*, pp. 244-45.
64. *Ibid.*, pp. 239-40.
65. William Matthews, *op. cit.*, p. 192.
66. *Ibid.*, p. 192.
67. G.L. Brook, *op. cit.*, p. 246.
68. *Ibid.*, p. 244.
69. William Matthews, *op. cit.*, p. 192.
70. G.L. Brook, *op. cit.*, p. 239.
71. *Ibid.*, p. 239.

72. *Ibid.*, p. 243-44.
73. 市河三喜, *op. cit.*, p. 296.
74. *Ibid.*, p. 297.
75. G.L. Brook, *op. cit.*, pp. 242-43.
76. *Ibid.*, p. 247.
77. *Ibid.*, p. 248.
78. *Ibid.*, p. 245
79. William Matthews, *op. cit.*, p. 189.
80. G.L. Brook, *op. cit.*, p. 243.
81. 原沢正喜、『現代口語文法』、(研究社、1957) p. 19.

Cockney in *Pickwick Papers*

With Special Reference to the Speeches of Sam & Tony Weller

Masanori MIYATA*

Cockney dialect used in Charles Dickens's *Pickwick Papers* (1836-7) is described in detail. It is classified into the 4 sections: 1) Phonology, 2) Vocabulary, 3) Grammar and 4) Syntax. Most of the Cockney appears in the speeches of Sam Weller and his father, Tony Weller. As they play very important roles in the progress of the novel, *Pickwick Paper*, so the Cockney spoken by them makes them appear tremendously vivid. Thus by making faithful representation of the 19th century Cockney, Dickens was successful in making Sam and Tony Weller immortal figures in the history of English novels.

Key words: Charles Dickens, *Pickwick Papers*, Same Weller, Tony Weller , Cockney

*Center for University Extension, The University of Tokushima

(出典：徳島大学大学開放実践センター紀要第14号、2003年より)